

学術情報センター ニュース

第49号目次

《トピックス》

[総合目録データベース図書所蔵レコード件数4,000万件突破](#)

[衆議院文教委員が学術情報センターを視察](#)

[平成11年度軽井沢公開セミナーの開催](#)

[学術情報センター軽井沢公開講演会報告 - 文書館・図書館・博物館：三つどもえの中の三者三様 -](#)

[情報政策とイノベーション - 経済イノベーション促進政策における学術情報の研究とサービスの役割 -](#)

[平成10年度COEプログラムの活動報告](#)

[新情報検索サービスの概要](#)

[英国物理学会刊行の電子ジャーナルの試験提供](#)

[学術雑誌総合目録和文編2000年版データ作成説明会の開催](#)

[「平成10年度学術情報データベース実態調査」結果をWWWで公開](#)

[「大学等の研究活動を総覧する情報提供サービス」の開始](#)

[北京日本学研究中心図書資料館の情報化支援](#)

[平成11年度新CAT/ILLシステム説明会の開催報告](#)

[\(財\)東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター作成の4 NACSIS-IRデータベース](#)

[平成10年度科学研究費補助金の実績報告](#)

《参加館紹介》

[長岡工業高等専門学校における学術情報センターシステムの利用](#)

[NCNP精神保健研究所図書室における学術情報センターシステムの利用](#)

《NACSISサービス案内》

[学術情報センターシステム利用の継続手続き](#)

[接続ニュース（平成11年7月23日現在）](#)

[MATHデータベースの一部サブファイルのサービス終了](#)

[平成11年度学術情報センターサービス利用者説明会の報告](#)

[電子図書館サービスの実施状況](#)

[NACSIS-IRデータベース増加状況](#)

[NACSIS-CATデータベース構築状況](#)

《教育・研修》

[平成11年度新NACSIS-IR対応（地域）講習会の案内](#)

[平成11年度学術情報センター「情報処理軽井沢セミナー」終了報告](#)

[科学実験教室「文部省学術情報センター見学会」の報告](#)

《講演会など》

[平成11年度学術情報センターシンポジウムの開催案内](#)

《その他》

[海外からの来訪者一覧（平成11年4月1日 - 7月31日）](#)

[人事異動（平成11年6月 - 8月）](#)

総合目録データベース図書所蔵レコード件数4,000万件突破

平成11年6月28日（月）に、総合目録データベース図書所蔵レコードの件数が4,000万件を突破した。

昭和60年7月に第1号の所蔵レコードが登録されてから、13年11か月目の達成となるが、一千万件ごとに達成に要した期間を見ると、以下のように毎回大幅に短縮されていることが分かる。

件数	達成日	運用開始からの年月	達成に要した期間
1,000万件	平成5年（1993年）4月27日	7年9か月	7年9か月
2,000万件	平成7年（1995年）12月1日	10年5か月	2年7か月
3,000万件	平成9年（1997年）11月28日	12年4か月	1年11か月
4,000万件	平成11年（1999年）6月28日	13年11か月	1年7か月

目録所在情報サービスの現況としては、毎年70前後の機関が新規に参加しており、平成11年6月末現在で685機関が参加している。

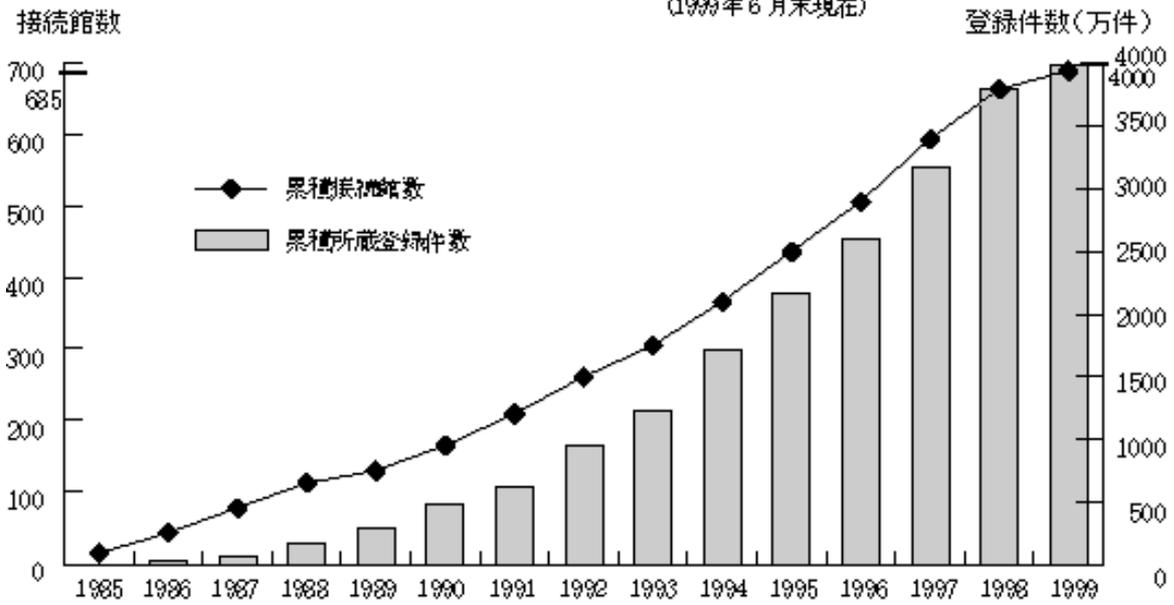
達成するまでの期間が短縮されている要因として、目録システムを利用する図書館が年々増加していることに加えて、各図書館で精力的に遡及入力を進めていることがあげられる。現在、図書所蔵レコードの登録数は、1日当たり約3万件となっている。

今回の4,000万件突破は、ひとえに総合目録データベースの充実を目指して積極的に参加していただいた各参加機関各位の御尽力の賜物である。

この場を借りてお礼を申し上げますとともに、今後なお一層の御協力をお願いしたい。

接続館数および所蔵登録件数の推移

(1999年6月末現在)



(目録情報課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

衆議院文教委員が学術情報センターを視察

衆議院文教委員会の小川委員長を含む委員11人が6月2日（水）、学術情報センターを訪れ、約1時間にわたって同センターを視察した。

一行は、文部省若松審議官，太田学術情報課長，猪瀬所長，岸管理部長らの出迎えを受けた後，別館会議室で猪瀬所長から同センターの概要について説明を受け，続いて，総合目録データベースWWW検索サービス，電子図書館サービス，研究者公募情報提供サービスについて，それぞれデモンストレーションが行われるとともに，活発な質疑応答が行われた。

今回の視察には，衆議院の木引参事ほか7名，文部省の玉井総務課長，豊田国会連絡調整室長らが同行した。



センターの概要説明を行う猪瀬所長



センターの概要説明を受ける文教委員
(総務課)

平成11年度軽井沢公開セミナーの開催

学術情報センター「国際高等セミナーハウス」は、平成9年5月20日に開館して以来、各種セミナーや研修に利用されております。昨年より、夏期公開セミナーとして軽井沢に在住および避暑を兼ねて夏期滞在中の方々を対象に、「軽井沢公開セミナー」を実施しておりますが、今年も下記のとおり開催されました。

本セミナーでは、所外の著名な方々を講師として、毎回午後4時から1時間ほどの講演が行われました。また、講演終了後には講師を囲んでの懇談も行われ、受講者には講演内容の理解を一層深めることとなりました。

記

7月31日(土)	簡明技術の推進	東京大学名誉教授 柳田博明氏
8月7日(土)	技術革新と国際競争力	東京大学先端経済工学研究センター教授 児玉文雄氏
8月28日(土)	地殻変動下の情報通信	東京大学名誉教授 安田靖彦氏
9月4日(土)	国家、民族そしてセルフ・アイデンティティ	Middlebury大学名誉教授 宮地宏氏
9月11日(土)	色彩と哀愁	ヴァイオリニスト 大津純子氏



猪瀬所長の挨拶



講演風景
(総務課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

学術情報センター軽井沢公開講演会報告

- 文書館・図書館・博物館--三つどもえの中の三者三様 -

学術情報センター名誉教授

井上 如

文書館，図書館，博物館（以下三館と略称）は，国や地方自治体レベルではそれぞれ独立した施設として設立，運営される傾向がある。しかし，研究対象としては，この三館を並べて同じ物差しで測ることで，個別に扱ったのでは見えにくいことが見えてくるのではないかと考えた。

三館を研究対象として一堂にという発想の根拠は，第一に，洋の東西を問わず歴史的なルーツを探れば，これら三館がルーツを共有した未分化の状態から分化してきたこと，第二に，公共的な組織はともかく各個人のレベルでは，やはりこれら三館が共存（手文庫，個人蔵書，応接間の飾り棚）していること，第三に，類似の法律的規定，専門職の配置，その養成機関と教育カリキュラム，二重の学的構造（原理を追求する文書学，図書館学，博物学と，それぞれの館の運営方法を実習する文書館学，図書館学，博物館学とが二重構造になっていること）など，他に無い共通点を有することにある。広くは，ユネスコなども，ICA，IFLA，ICOMを設けて並べて扱う傾向がある。三つどもえと称するゆえんである。

しかもなお，これら三館はそれぞれ明らかに異なる特徴を備えている。だからこそ，歴史的過程で，それぞれの特徴を活かすような発展過程をたどって今日に至ったと理解される。しかし最近の広い意味での情報学の進歩は，これら三館を分析対象として一堂に並べて扱うことの新たな有効性を示唆しているように思われる。そこでここでは，コピー，コミュニケーション，コレクションという，三つの情報学的着眼点からこれら三館を比較分析してみることにする。その際，比較を踏まえた理解を容易にするために，表「三つどもえの中の三者三様」を用意した。なお，演者は，表の各コラムの説明に際し，8点の具体例を回覧した。

表に入る前に三つの着眼点について簡単に説明しておきたい。コピーは，オリジナルとの関係から二種類の視点を用意した。第1は，オリジナルの側に軸足を置いて，オリジナルから容易に区別できるコピーほどマイナスに評価するホンモノ志向の視点であり，第2は，コピーの側に軸足を置いて，オリジナルから逸脱するほどそこに働く多様なコピー創造のイマジネーションをプラスに評価するニセモノ/ミセモノ志向の視点である。コミュニケーションでは，三館の収蔵物（文書，文献，オブジェクト）が記号の乗り物として果たす機能に着目し，三館それぞれで働く専門職と利用者とのインターフェイスは捨象する。それら記号乗り物の発生，収集，伝来，そして利用者による受け止め方に着目する。コレクションでは，もっぱらその価値の発生の根拠がどこにあるかを，コピーやオリジナルとの関係から見定めるということをする。

さて表「三つどもえの中の三者三様」のうち，コピーとオリジナルとの二者択一としてみると，文書館は明らかにオリジナルを評価する。活字化したものよりも，毛筆や羽根ペンを使った手書きの文書を，そして綴じ本では刊本よりも写本を評価するのに対し，図書館ではコピーしか存在しないという特徴を有する。図書館に備えられている文献は，不特定多数向けに印刷された中の一冊であって，それはまさにコピーである。さて，博物館では，こうした二者択一に無頓着である。博物館の中で宝物館と呼ばれる一群は，オリジナルにこだわるが，それは，現在，博歯館の主流ではない。

ミニチュア化した複製やレプリカでいいからコレクションを多様化する方向に向かっている。ただし同じ博物館というカテゴリーにありながら美術館だけは例外で、オリジナルを重視する。

文書館にある文書は、文書館の外で既に一度コミュニケーションの役に立った遺物である。大部分の文書は本来の機能（現用と呼ばれる）が終わると廃棄されるが、なお歴史研究など二次的に有用と判断されたもののみが移管されて保存される。従って、一度済んだ本来的な機能でなく、二次的なコミュニケーションのためにあるといえる。一方、図書館の文献はまだコミュニケーションの途中である。著者から読者へのコミュニケーションの過程で、図書館で読者がくるのを待っている状態である。コミュニケーションは未完了である。博物館では、送り手から受け手へのメッセージの伝達という、本来的な意味でのコミュニケーションは通用しない。

コレクションという観点から見ると、文書館がコレクションの量より質を重視するのに対して、図書館は質より量を重視する。文書館では、長期保存に耐える文書のみを対象とするというセレクションが強く働くのに対し、蔵書が多ければ多いほど利用者のニーズに対応する潜在可能性が増えるということから、この両者の違いは明らかである。もとより、量より質という価値観は美術館にも当てはまる。美術館をのぞく博物館は、量でも質でもなく、個々のオブジェクトと、コレクション全体の二つのレベルで、そのユニークさ（no-two-alikeと言う表現が、コレクション研究の英文文献では用いられる）が問われる。

以上の諸説に対し、五人の出席者から質問やコメントがあった。それらはすなわち：三館の機能を情報収集／提供としてとらえたとき、すべて電子メディアで置き換えることが可能か；写真におけるオリジナル／コピーの関係、および、現代の博物館計画におけるフリークの重要性；自然史博物館の研究と比較した時の人工物博物館研究の立ち後れ；電子美術館では、もとの美術作品に対して手を加えて、オリジナルともコピーともつかぬものを作り出すことができる。写真と同じことがあるのではないか。また、版画をコピーと言ってしまふのには、それぞれの間違いが有り過ぎる。更に、美術館、博物館のルーツは王侯貴族の私物としてのコレクションであり、それが次第に公開されていくと言うのがその過程ではないか；文書館、図書館は無料だが博物館だけ有料なのは、コストだけでは説明できない。また、こうした三者三様の比較を、舞台芸術についても試みられないか；博物館は絶対量の増加につれて質の低下が問題となっているが．．．等々であった。

また、閉会后今日まで、多数の質問や意見、更に助言が寄せられた。その中には、漠とした問題をただ一つの表から提起しようとする事自体が無謀だ；三館の各要素が混在しているのは何も個人の自宅に限らない；世に記念館と言われているものは三館の要素の混在である；演者は静的なメディアのみを扱い、しかもその論旨は動的なメディアへの応用性を欠いている；写真の問題を版画との比較から論ずることの是非、あるいは可否；などであった。

<p>三つの着眼点 館種の別</p>	<p>コピー／オリジナル 間の関係</p> <p style="text-align: right;">C1</p>	<p>利用とコミュニケー ション</p> <p style="text-align: right;">C2</p>	<p>コレクショ ン</p> <p style="text-align: right;">C3</p>

		copy(C)とoriginal(O)の二者択一approximate copy (a.c.)の許容度公的機関と個人用の間の遠近 今日的課題	やりとり完了後の過程と未完了 時間軸上と空間軸上とのバランス 公開，未公開，選択的提供 今日的課題	コレクションの評価基準 収集経路 公的収集と個人コレクション 今日的課題
文書館	国，地方自治体等が法律等に基づいてそれぞれ公文書館を設立し運営している。企業，団体等も史料を管理する部局を置いている。個人は自宅の手文庫で私文書等を管理している。公的な文書館はアルキビストを必要とし，そのための教育施設と文書館学に期待がかかる。協議会等の組織がある。	1) 二者択一的にオリジナルの重視手書き（毛筆／羽根ペン）の価値 2) 活字化を巡る評価 3) 公的機関と個人用の連続性 4) マルチメディア化と史料学の勃興 AC1	1) 本質的なやりとりは完了 2) 非現用史料の二次的利用 3) 時間軸上での選択的コミュニケーション 4) 情報公開法とプライバシー保護 AC2	1) 量より質が価値を決定 2) 収集経路：伝来 3) 公より私という伝統 4) 廃棄と管轄替えの問題 AC3
図書館	国，地方自治体等が法律等に基づいてそれぞれ図書館を設立し運営している。企業，団体等も蔵書を管理する部局を置いている。個人は家庭に書架を備え蔵書を維持している。公的な図書館はライブラリアン（司書）を必要とし，そのための教育施設と図書館学を発達させた。協議会等の組織があ	1) 二者択一的にコピーのみの存在 2) 著作権法の不思議 3) 紙（冊子体）への固執 4) 複本（duplicates） LC1	1) 未完了（コミュニケーション過程そのもの） 2) 強迫観念としての利用（未・非利用の問題） 3) 出版界の問題へのvulnerability 4) 検索と情報縮約の不可避性 LC2	1) 質より量が価値を決定 2) 収集経路：新刊書流通ルート，古書店 3) 個人蔵書における形式と希少性への回帰 4) 書誌コントロール LC3

	る。機能的に教育支援と研究支援とに分かれる。				
博物館	国，地方自治体，企業，団体等が博物館や美術館等を設立して運営している。多彩な収集資料に基づき館種も多様（博物館，美術館，動・植物園，民家園，水族館等々）である。個人のコレクションは更に多様で標準化を拒む。公的な博物館は博物館学に学んだキュレータ（学芸員）を擁する。支援組織と協議会等の組織が発達している。	博物館	1) コピー/オリジナルに対する無頓着 2) a.c.の最大限許容（モデルとレプリカ） 3) 等身大の原理とミニチュア化 4) 恣意的イマジネーションと創造力 MC1	1) 参加，即コミュニケーション（旅行を含む） 2) オブジェクツの利用価値からの絶縁 3) 一過性のコミュニケーション 4) 公における来観者の漸減 MC2	1) ユニークさが価値を決定 2) 収集経路：市，コレクター 3) 好奇心と個人コレクションの先導性 4) 市場経済下のコレクション MC3
		美術館	1) 二者択一的にオリジナルの重視 2) 修復による永久指向 3) 問題提起としての版画 4) 公と私におけるOとCの二極分化 RC1	1) 保存>コミュニケーション 2) 展示，複製による提供 3) 画廊離れ 4) カタログ・レゾネとデータのオーセンティケーション RC2	1) 量より質が価値を決定（希少性） 2) 収集経路：画商，オークション 3) コレクション研究の勃興 4) 真偽鑑定 RC3

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

情報政策とイノベーション

- 経済イノベーション促進政策における学術情報の研究とサービスの役割 -

ハーバード大学ケネディ政治学部名誉教授

ルイス M ブランスコム

1. はじめに

去る5月24日(月)に弘済会館において標記講演会が行われた。NACSIS Invited Lecture Seriesは昨年度から開始された研究開発部主催の企画であり、国際的に著名な学者・研究者が本センターを訪問する機会に、公開で学術講演をお願いするというものである。今回のブランズコム教授は情報政策学の第一人者であり、IBM研究担当副社長、NSB長官、米国大統領科学顧問委員、全米科学技術会議議長を歴任され、全米科学アカデミー(NAS)会員、全米工学アカデミー(NAE)会員である。また、日本工学アカデミー(JAE)外国人会員で、日本学術振興会先端技術と国際環境第149委員会の米国側委員会メンバーである。今回は特に、工学アカデミーと149委員会関係の方々にも案内を出して、外部で開催した。以下、講演要旨を紹介する。

2. 講演要旨

2.1 情報サービスの重要性

全ての先進工業国は政策的な重点を、“研究と政策の調和のとれた投資”の方向にシフトしつつあるが、これは研究からもたらされた技術的アイデアをベースとしている。イノベーション政策は、税金、制度、競争、貿易政策、知的財産権法の考慮に加えて、最近の研究の結果、“情報インフラ”という新しい要素が明らかとなった。これが、専門知識の波及や取得を決定する重要な要因であることが分かったからである。米国政府の政策担当者はこのことの重要性をしばしば過小評価するが、学術情報の研究とサービスはイノベーションを可能とする神経系統である。

学術情報サービスは、一次データの品質と信頼性、他分野での利用の提供、情報の生産者と利用者の持続的協力のためのネットワーク、にかかわる問題を含んでいる。このようなサービスを支える科学技術者への報酬制度が十分でないために、これらの研究やサービスに献身しようという意欲を喚起しないのは問題である。政府は十分な公的補助の対象となるよう重要議案として取り上げるべきである。

さて、情報インフラは次の3つの要素から構成されている。

- 1) 情報の生成：研究および情報収集。
- 2) ネットワーキング：所在，アクセス，評価，獲得
- 3) 処理：質の評価，利用のための準備

一方、多くの国で、政府は、研究助成の主要な役割を担い、情報通信制度や情報サービス支援(日本におけるNACSISやアメリカにおけるMedlars)を通して情報ネットワーク化を促進しているが、質の評価やサービスにおける利用の支援は民間に頼っている。米国では、この政策は“供給側”の科学技術政策に反映されている。つまり、主たる公的投資は、知識の生成、および、研究をより効率的に行うために知識を

生成するための共同体内でのコミュニケーションの道具を供給すること，に向けられている。これは「横型」コミュニケーションである。

2.2 横型と縦型のサービス

横型のサービスは，仲間同士のものであり，読み手が文献を理解し評価するのを支援する付加的処理は全く必要ない。Physical Reviewのような査読型論文誌はこのサービスをしている。米国における研究資金は，研究のスポンサーや，著者と読者の両者を代表する専門学会によって共有される。著者，査読者，編集者，読者は同じ学会の中で組織されるので，情報サービスのこの部分はとても良く整備されている。

縦型サービスは，データを造り出した研究分野以外の専門家たちに役立つものにするサービスをいう。例えば，エンジニアは物理や化学の研究から造り出された物質や原料の属性データを使うかもしれないし，臨床医学の研究者は生化学や分子生物学のデータを使うかもしれない。この種のサービスは，情報インフラの中でも，極めて研究開発支援が不足している分野である。データ・アクセスや，利用プロセスへの投資は，イノベーション・プロセスの生産性を上げることに貢献しうるし，また，研究者からユーザへの知識の波及にとって肝要な部分である。これは“需要側”のR & I（研究革新）政策のキーとなる。

2.3 利用指向のデータ評価とネットワーキング

インターネットは，ユーザ・ニーズの表現，データの集積，分散協調的評価，およびユーザからのフィードバックに対して，劇的可能性をもたらした。しかし，情報に関して基本的な要件は，ユーザ共同体自身によって十分なデータ信頼性とアクセス性が保証されることである。これが高価な仕事であり，特別な才能が要求される。問題は，学問の世界では創造性は報いられるが，ユーザ・サービスは報いられないことなので，効果的な動機づけを与えられないことである。この種の投資は，“供給側”のR & I政策である。商業界では横型サービスはビジネスチャンスとなるが，コストも時間もかかるデータ評価の必要な縦型サービスへは，投資しようとはしない。

もし政府が，データ評価，利用指向サービス，更にアクセス容易なデータ集積に投資する用意があるならば，インターネットはこれをより効果的にするための魅力的な可能性を提供してくれる。例えば，データ評価の仕事は地理的に広い範囲での活動として組織されうるし，wwwを通して供給されるデータサービスへアクセスすることによってすばらしいユーザインターフェースが提供されるし，学会は評価済のデータコレクションを証明する情報を提供することができる。しかし，データ評価に十分な金額を投資してもらうには，克服すべき困難がある。例えば，web siteに大量のインフォーマルな電子出版物や，ドラフト原稿が送られると，研究者同士での相互査読の量が増えてやっかいなことになる。

2.4 結論：緊急課題

1) 政府は，需要志向型の研究やイノベーション政策を採用すべきである。キーとなる要素は，データ評価や利用に促したサービスを育成すること，つまりユーザー主導型データベース戦略である。政府研究投資の10%程度がこの為に消費されるのが適切な水準である。これは，データ評価に加えて，イノベーションを目指す研究者の生産性を向上するために，論文審査その他の高価な学問的活動への投資を必要とする。

2) 国家的情報ネットワークや情報収集の管理者は，他の学問分野におけるユーザの

ために、データの質的評価を伝達し確立するためのプロトコルや、標準を確立するための協力を促進すべきである。CODATAはこうした努力に貢献すべきである。

3) 利用に促した情報サービスのための協力ネットワークは、国際的に調整されるとともに、知的財産権に関する合意によって進められるべきであり、国際的なアクセス手段によってデータ評価、ユーザ、再出版の処理がなされるべきである。これによるユーザのコスト負担増は、アクセスに要する費用の最低限に抑えられるべきである。つまり、Webを使ったサービスにおいては最小限のコストであるべきである。



72才とは思えぬ若々しいお声で熱弁をふるわれるフランスコム教授



熱心に聞き入る聴衆

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

平成10年度COEプログラムの活動報告

研究代表者 学術情報センター教授

小野 欽司

1. COEプログラムの概要

学術情報センターにおいて平成7年度から実施している文部省による卓越した研究拠点形成の一環である中核的研究機関支援プログラム（COE：Center Of Excellence）では「学術情報の高度化および次世代情報ネットワークの構築に関する研究一次世代学術情報基盤のためのオープンプラットフォーム」のテーマのもとに、学術情報センター研究開発部の教官や外国人研究者、COE研究員を中心として研究を進めている。

2. 研究プロジェクト

本研究では、21世紀にも通用する新しい学術情報基盤や知的資産形成に必要な情報学、情報科学・技術に係る基盤的・総合的研究を国際的な視野のもとに行うことを目的としている。

現在以下の8つのプロジェクト研究（プロジェクト：プロジェクトリーダー名）および情報学の基礎となる個別研究を行っている。

- 1) アクティブハイパメディア・デリバリーシステムに関する研究：F.Andres
Active Hypermedia Delivery System (AHYDS) and Phasme Project
- 2) 情報検索への応用を考慮した自然言語処理基本ツールの研究：影浦峽
- 3) ネットワーク情報システムにおける戦略的管理情報収集と分析・応用に関する研究：藤野貴之
- 4) 情報関連研究の実体と日米比較に関する調査研究：西沢正己
- 5) INTERNETを用いた高等教育を対象とする遠隔教育システムの研究：上野春樹
- 6) ネットワーク環境での衛星画像データベースの内容検索：北本朝展
- 7) インターネット上での協調的辞書構築支援システムに関する研究：A. Uuthichai
- 8) GUI構築を対象とした制約プログラミング言語処理系に関する研究：細部博史

上記に関する研究の進捗状況をまとめた中間報告書を平成10年12月に発行し、また平成11年7月には各プロジェクトの研究評価も兼ねた研究発表会を行った。

3. COE研究員

外国人研究員のAndres博士（Paris VI大学 仏〔H8.7～〕）が小野教授の指導の下に引き続き研究を行っているが、他にCOE研究員として次の2名がCOEプログラムに加わっている。Andres博士は新しいデータベースエンジンPhasmeやオープンなハイパメディアシステムAHYDSの研究開発で多くの成果を挙げている。

内山清子さんの専門は自然言語処理で民間企業や慶応義塾大学で研究開発活動に従

事した後、影浦助教授の指導で平成10年度からCOE研究員に加わっている。主にコンピュータで扱う辞書（概念辞書）の構築について研究を行なっている。研究テーマは「専門分野における複合語（専門用語）の解析」で、情報を検索するためのキーワードとして専門用語（複合語）が多く使用されるため、専門用語を解析することが重要となる。専門用語を解析するために、複合語を構成している語基についてそれぞれの文法的特徴や語基間の係り受け関係、結合関係、意味関係を段階別に整理している。特に従来の品詞枠では扱えなかった部分について文法的特徴別にカテゴリーを設定し、実際に情報処理用語の複合名詞にあてはめて評価を行なうなど文法レベルにおける専門用語の解析に関する研究を行っている。

ウッチェチャイさんはタイのチュラロンコーン大学を卒業した後、日本の文部省の奨学金を受け、平成4年に来日した。半年間東京工業大学留学生センターで日本語を勉強し、平成5年に同大学大学院制御工学科へ入学した。平成11年2月に博士課程の単位を取得退学した後、COE研究員に採用され相澤助教授の指導を受けている。大学では分散型ロボットに関する研究をし、論文のテーマは“遺伝的方法による分散駆動型機械システムの自発的運動パターン生成に関する研究”で、本センターではインターネットの応用の一つとして、居場所が異なる参加者の協力のもと、協調的辞書構築支援システムに関する研究をしている。具体的には、SaiKamと言う日タイ辞書構築環境の問題点や課題を探るとともに、日本語学習者や辞書構築者に対する用例の適合度評価および学術的テキストからの専門用語用例の自動引用の方式について研究を行っている。

4．今後の計画

本研究は、現在の学術情報センターの研究開発部における使命や活動にとらわれない自由な、新しい発想の下で進めてきたものである。

現在推進されている情報学の中核的研究機関のコンセプトを先取りし、その実現に学術情報センターとして具体的なアウトプットとして貢献できることを示すことが重要である。

平成12年3月8、9日には、学士会館および新しい学術情報センターのビルで「次世代学術情報環境を支えるオープンプラットフォームとその応用」というテーマで国際シンポジウムの開催を計画している。

第1日目は世界の著名な研究者による21世紀の情報学に関する様々な視点からの講演を、第2日目にはそれぞれのテーマに分かれて分科会を構成し、より突っ込んだ専門的議論をするワークショップを計画している。上記に挙げた各研究プロジェクトについても研究成果を発表する予定である。

本年度で今回のCOEプログラムは終了するが、各研究プロジェクトにおいては、残された期間でそれぞれの研究目標の遂行に努力すると共に、将来に向けて新しい研究テーマの発掘、方向づけに役立てるよう努力している。



Dr.Andres



内山さん



Mr.Vuthichai

新情報検索サービスの概要

学術情報センターは、平成12年1月からオープンシステムに対応した新しい情報検索サービスを開始する。

この新情報検索サービスについては、本センターニュースのほか、平成10年度の新情報検索システム試験公開の実施と全国での説明会開催によりその内容を紹介してきたが、サービス開始に向けてのサービスの概要と平成11年度試験公開の計画をお知らせする。

1．サービス名称

サービス名称とその英文名称は、従来と同じく「学術情報センター情報検索サービス」と「NACSIS-IR」とする。

新たにサービスを提供するWWWを利用した検索については、NACSIS-IR Web-Frontの名称でサービスを行う。

2．新サービス開始時期

平成12年1月から新サービスを開始し、従来の汎用機を利用したサービスを終了する。

サービス開始の具体的な日時などについては、センターニュース、WWWなどで別途ご案内したい。

3．サービスデータベース

現在サービス中のデータベースについては、以下のものを除き57種を継続提供する予定である。

サービス終了予定データベースは、次の二つである。

(1) 電気化学データベース

検索システムの受入中止に伴いサービス終了

(2) 学会予稿集電子ファイル

電子図書館サービスへ移行に伴いNACSIS-IRでのサービス終了

その他、次の2つを新たにサービス開始予定である。

(1) Index to Scientific and Technical Proceedings

(2) 引用文献索引データベース(仮称)

これにより平成12年1月時点では59種のデータベースを提供予定であるが、新規・終了などにより変更される場合もある。

4．サービス機能の変更点

原則として、従来からの利用者番号とサービス機能を継承することとし、その他の変更点は、次のとおりである。

(1) WWWによる検索インタフェースを新たに提供する。

(2) 学術情報センターと科学技術振興事業団とのゲートウェイ接続は、学術情報センターから科学技術振興事業団への接続はTelnet接続とWWW経由とし、科学技術振興事業団から学術情報センターへの接続は、Enjoy JOIS (WWWインタフェース) 経由のみとする。

(3) 学術論文データベース (第一系・第二系・第五系) と臨床症例データベースでの図版・数式等の画像の出力方式を、ファクシミリ出力からWWWブラウザへの表示に変更予定である。

5．平成11年度新情報検索システムの試験公開

平成10年度に引き続き、新情報検索システムの試験公開を次の要領で実施している。

(1) 利用資格者

現行の情報検索サービスの利用者番号を取得している方。

(2) 実施期間および利用時間

実施期間： 平成11年9月1日(水)～平成11年10月8日(金)

利用時間： 月～金： 9:00～翌2:00

土： 9:00～14:00

(3) 検索インタフェース

従来のコマンド方式によるものと、Web方式によるGUI方式の両方の検索方法を提供する。なお、試験公開のため、表示件数に制限を設ける。

(4) 利用料金

無料

(5) 公開データベース(予定)

SCI, SSCI, AHCI, ISTP, 学会発表データベース, 雑誌記事索引データベース目録所在情報データベース(雑誌), 家政学文献索引データベース

(6) 接続先

WWWによる検索：<http://testir.nacsis.ac.jp/>

Telnetによる検索(コマンド方式)：telnet://testir.nacsis.ac.jp

(7) 利用上の注意

本サービスと同様に、著作権を尊重してご利用いただきたい。

試験公開のデータベースは、現行NACSIS-IRのデータベースとは更新のタイミングが連動していないため、収録範囲および件数が異なる場合があります。

システムの改善のため、予告なしに停止することもあるのであらかじめご了承ください。

なお、具体的な利用方法などについては、新情報検索サービス（試験公開）のWebページ（<http://testir.nacsis.ac.jp>）および「新IRシステム説明会資料（平成10年11月）」（同WebページにPDF形式で掲載）をご覧ください。

利用者、大学図書館と関係機関のご理解・ご協力をお願いしたい。

（データベース課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

英国物理学会刊行の電子ジャーナルの試験提供

本センターの電子図書館サービス拡充の一環として、理工学分野の学術雑誌である英国物理学会（IOP: the Institute of Physics）刊行の電子ジャーナルの試験提供を我が国の大学、短期大学、高等専門学校および大学共同利用機関を対象として平成11年度に実施している。以下の論文誌が利用可能であり、また、論文誌により異なるが、発行前（1か月～2週間前）の論文誌を見ることができる。

論文誌名	全文		抄録	
	年度	巻	年度	巻
(1)Bioimaging	1993-1999	1-7		
(2)Classical and Quantum Gravity	1993-1999	10-16	1984-1992	1-9
(3)Combustion Theory and Modelling	1997-1999	1-3		
(4)Distributed Systems Engineering Journal	1994-1999	1-6		
(5)European Journal of Physics	1993-1999	14-20		
(6)High Performance Polymers	1993-1999	5-10		
(7)Inverse Problems	1993-1999	9-15	1985-1992	1-8
(8)Journal of Micromechanics and Microengineering	1993-1999	3-9	1991-1992	1-2
(9)Journal of Optics*	1993-1998	24-29		
(10)Journal of Optics A: Pure and Applied Optics	1999	1		
(11)Journal of Optics B: Quantum and Semiclassical Optics	1999	1		
(12)Journal of Physics A: Mathematical and General	1993-1999	26-32	1980-1992	13-25
(13)Journal of Physics B: Atomic, Molecular and Optical Physics	1993-1999	26-32	1980-1992	13-25
(14)Journal of Physics D: Applied Physics	1993-1999	26-32		
(15)Journal of Physics G: Nuclear and Particle Physics	1993-1999	19-25	1980-1992	6-18
(16)Journal of Physics: Condensed Matter	1993-1999	5-11	1980-1992	1-4

(17)Journal of Radiological Protection	1993-1999	13-19		
(18)Measurement Science and Technology	1993-1999	4-10	1990-1992	1-3
(19)Modelling and Simulation in Materials Science and Engineering	1993-1999	1-7		
(20)Nanotechnology	1993-1999	4-10	1990-1992	1-3
(21)Network: Computation in Neural Systems	1993-1999	4-10	1990-1992	1-3
(22)Nonlinearity	1993-1999	6-12	1988-1992	1-5
(23)Physics Education	1993-1999	28-34		
(24)Physics in Medicine and Biology	1993-1999	38-44		
(25)Physiological Measurement	1993-1999	14-20		
(26)Plasma Physics and Controlled Fusion	1993-1999	35-41		
(27)Plasma Sources Science and Technology	1993-1999	2-8	1992	1
(28)Public Understanding of Science	1993-1999	2-8		
(29)Pure and Applied Optics: Journal of the European Optical Society Part A*	1993-1998	2-7		
(30)Quantum and Semiclassical Optics: Journal of the European Optical Society Part B**	1993-1998	5-10	1989-1992	1-4
(31)Reports on Progress in Physics	1993-1999	56-62	1983-1992	46-55
(32)Semiconductor Science and Technology	1993-1999	8-14	1986-1992	1-7
(33)Smart Materials and Structures	1993-1999	2-8	1992	1
(34)Superconductor Science and Technology	1993-1999	6-12	1988-1992	1-5
(35)Waves in Random Media	1993-1999	3-9	1991-1992	1-2

*1999年よりJournal of Optics Aに改題 **1999年よりJournal of Optics Bに改題

(データベース課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

学術雑誌総合目録和文編2000年版データ作成説明会の開催

本誌前号（48号）で案内したとおり，平成11年11月1日～平成12年3月31日までをデータ作成期間として，学術雑誌総合目録和文編2000年版の編集作業を行う（調査基準日は，平成11年11月1日）。

これに伴い，新規参加館と新規担当者を主な対象に，データ作成説明会を次のとおり，東京と大阪の2か所で開催する。

なお，本編集作業への参加機関には，別途，データ作成説明会の開催案内を行っている。

問い合わせ先：

目録情報課雑誌目録情報係

TEL：03-3942-6985，6986 FAX：03-3944-7131

会場名	開催場所	開催日	開催時間
東京会場	東京大学大講堂 （安田講堂）	11月5日（金）	13:30 - 16:30
大阪会場	大阪府立中央図書館ホール （ライティホール）	11月11日（木）	〃

（目録情報課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

「平成10年度学術情報データベース実態調査」結果をWWWで公開

学術情報センターでは、学術研究のために研究者や大学・研究機関などが作成・提供しているデータベースに関する「学術情報データベース実態調査」を行い、平成7年度から調査結果を基に「作成データベース一覧（分野別）」を作成し、WWWで公開している。

このたび、平成10年度の調査結果に更新し、この調査で報告された作成データベースの総数2,411件のうち、WWWにより作成データベースの案内・利用が可能との回答があった590件についてはリンクを張っている。

各大学などの機関の作成データベースのホームページに、直接リンクをたどることができるので、是非、ご覧いただきたい。

本センターでの紹介ホームページ
<http://www.nacsis.ac.jp/ir/dbdr/dbdr.html>

なお、「作成データベース一覧（分野別）」の一層の充実を図るため、上記ホームページで「リンク募集」を行っているので、ご協力をお願いしたい。

（データベース課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

「大学等の研究活動を総覧する情報提供サービス」の開始

このたび本センターでは、大学などの研究活動に関する情報（研究者、研究課題、研究施設・設備など）を収録した総合的なデータベースを構築し、平成11年6月21日から「大学等の研究活動を総覧する情報提供サービス」として、インターネットを通じて国内外に提供を開始したので、概要をお知らせする。

なお、この事業は、本センターと科学技術振興事業団が共同で実施している。

1．サービスの名称

大学等の研究活動を総覧する情報提供サービス（略称：研究活動資源ディレクトリ）

Directory of Research activities and Resources（略称：NACSIS-DiRR）

2．概要

本センターで収集した下記の情報を、WWWブラウザから検索・表示可能である。

研究機関・研究課題

研究資源

研究者情報

また、本センターで収集した情報と科学技術振興事業団が収集した情報を、WWWブラウザから横断的に検索・表示することも可能である。

3．掲載項目

研究機関・研究課題

機関・学部・学科などの名称，所在地，設立年月日，電話番号，FAX番号，沿革，設置目的（研究課題），事業概要，代表者名，教職員数，大学院生（博士）在籍者数，下部組織数と名称，総会などの会議，敷地・建物面積，予算額，定期刊行物，研究分野，最近の研究成果，保有特許件数，所在地案内，交通手段，学術研究集会

研究資源

研究資源名，研究資源分類（研究領域・資源媒体），研究資源の概要，サンプル，利用環境，利用方法，関連情報，利用手続き，機関名，担当者（担当者名，所属部署名，所在地，電話番号，FAX番号，E-Mailアドレス）

研究者情報

氏名，所属機関・学部名，職名，名誉教授大学名，現在の専門分野，現在の研究課題，研究業績（主要3件）

4．検索方式

ディレクトリ検索と全文検索の二つの方式を用意している。

ディレクトリ検索は、機関種別、研究分野別、所在地地域別の各メニューから選択していく方式である。

全文検索は、キーワードを入力する方式で検索する項目の指定も可能である。

なお、「横断検索」は、全文検索の方式のみである。

5．WWWブラウザでのアクセス

<http://dirr.nacsis.ac.jp/>

ブラウザは、Netscape Navigator/Communicator Version 3以上又はMicrosoft Internet Explorer Version 4以上を推奨

参考：科学技術振興事業団が提供している情報へのアクセス

<http://read.jst.go.jp/>（研究開発支援総合ディレクトリ，略称：ReaD）

6．利用時間

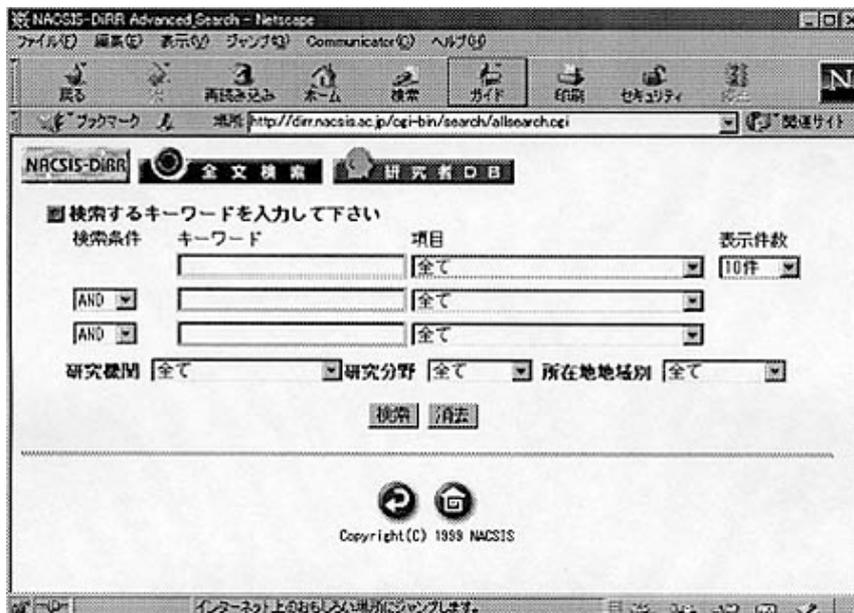
原則24時間（なお、システム保守などのためサービスを停止することがある。）



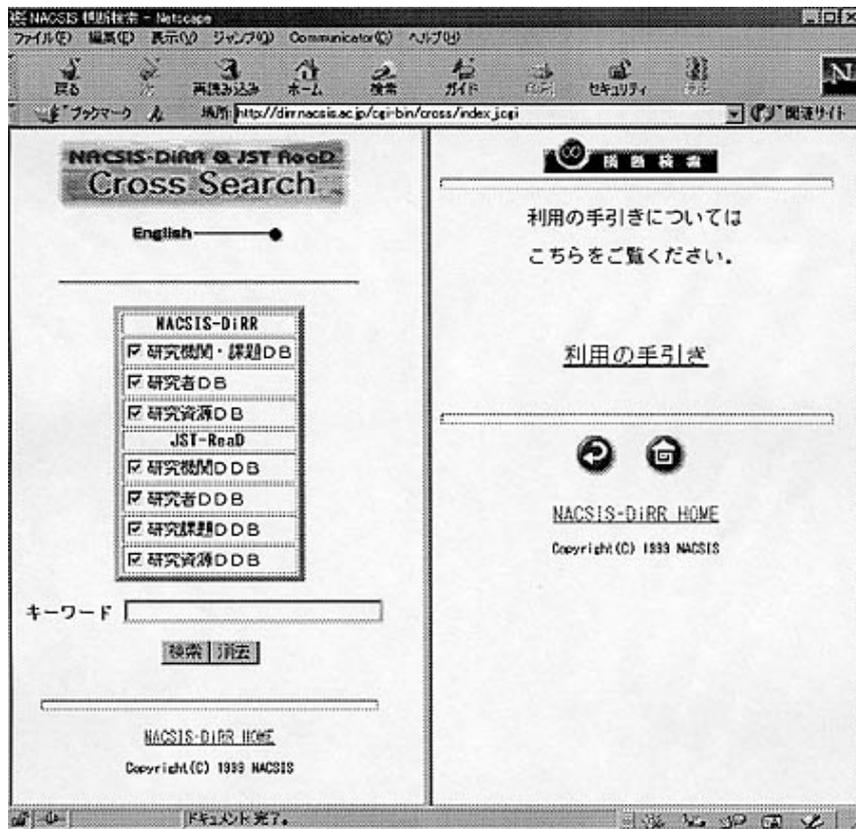
トップページ画面例



ディレクトリ検索画面例



全文検索（詳細検索）画面例



横断検索画面例

(データベース課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

北京日本学研究センター図書資料館の情報化支援

学術情報センターでは、国際交流基金、北京外国語大学と北京日本学研究センターの要請を受けて、平成10年度より北京日本学研究センター図書資料館の情報化支援を行っている。

平成10年度は、10月に北京日本学研究センター図書資料館にて、情報化推進準備作業を行い、併せてワークショップを開催した。

また、北京日本学研究センターより2名の図書資料館職員などを招へいし、平成11年1月に図書館員研修を実施した。

これらの実施内容の詳細については、本センターニュース第47号（1999.3）にて紹介している。

一方、北京日本学研究センターにおける目録所在情報サービスの利用状況も順調で、蔵書の約3割に相当する資料約19,000冊分が処理され、約13,000件の所蔵が登録済みとなっている。

これらの活動報告は、「中国との学術情報交流プロジェクト1998年度報告」として平成11年3月に刊行された。

平成11年度は、図書資料館へコンピュータシステムの導入と、担当者の研修を予定している。

コンピュータシステムの導入に当たっては、平成11年6月20日から27日まで北京日本学研究センターへ当センター職員が出張して支援を行った。

その他、今回の情報化支援について北京日本学研究センター関係者への理解を深めるため、現地で北京日本学研究センターの教職員との意見交換を行った。



システムの説明を受ける図書資料館員



システム導入セレモニー
(ネットワーク課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

平成11年度新CAT/ILLシステム説明会の開催報告

本誌前号（48号）でお知らせしたとおり，平成11年度の新CAT/ILLシステムに関する説明会を，下記の日程で開催した。

地区名	開催日	会場
北海道地区	平成11年7月13日（火）	北海道大学
東北地区	平成11年7月1日（木）	東北大学
関東・甲信越地区	平成11年6月29日（火），30日（水）	東京医科歯科大学
中部地区	平成11年7月15日（木）	名古屋大学
関西地区	平成11年7月22日（木）	京都大学
中国・四国地区	平成11年7月27日（火）	広島大学
九州・沖縄地区	平成11年7月6日（火）	九州大学

説明会では，平成12年1月からの運用を予定している多言語対応目録システムの概要についての説明を行ったほか，中国語資料の取扱い，図書館システムの対応などについても説明した。

また，多言語対応目録システムを利用した，中国語クライアントのデモンストレーションも行った。

各会場とも多数の参加があったが，これを機会に各図書館での多言語対応の検討を開始していただきたい。

会場をお世話いただいた関係者の方々には，この場を借りてお礼申し上げたい。



東京医科歯科大学

九州大学



(目録情報課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

(財)東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター作成の4 NACSIS-IRデータベース

(財)東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター 研究員

後藤 敦子

1. はじめに

財団法人東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センターは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）と日本ユネスコ国内委員会との協力・援助によって、昭和36年7月1日に、世界でも有数の東洋学に関する蔵書を誇る財団法人東洋文庫の附置機関として設立された調査研究機関である。以来、東アジアを中心とするアジア諸地域の人文・社会科学分野でなされている研究に関するインフォメーションセンターとして、調査研究・出版・資料保存などの事業を実施してきた。

2. データベースの概要

当センターでは、学術情報センターのご協力により、4件のデータベースをNACSIS-IRで平成8年10月1日から公開している。データベースの概要は以下のとおりである。

(a) 中央アジア研究文献索引データベース

我が国における中央アジア地域に関する人文・社会科学分野の学術文献の索引情報

収録件数 15,816件

呼び出しコマンド BCAJ

(b) 中東・イスラーム研究文献索引データベース

我が国における中東イスラーム地域に関する人文・社会科学分野の学術文献の索引情報

収録件数 18,205件

呼び出しコマンド BIMEJ

(c) アジア歴史研究者ディレクトリ

我が国で研究活動している東洋史研究者のプロフィールおよび発表論文情報

収録件数 1,800件

呼び出しコマンド RESAHJ

(d) 印度学・仏教学研究ディレクトリ

我が国で研究活動している印度学・仏教学研究者のプロフィールおよび発表論文情報

収録件数 758件

3．データベース作成の経緯

当センターの事業の一つとして、かつて「文献目録および研究者・研究機関名簿の編集・出版」があった。その成果は、英文出版物として刊行し、国内外の研究機関・大学・図書館などに寄贈した。

これまでに、*Bibliography of Central Asian Studies in Japan, 1879- March 1987*（昭和63年）、*Bibliography of Islamic and Middle Eastern Studies in Japan, 1868-1988*（平成4年）、*Directory of Asian Studies in Japan*（平成4年、平成8年改訂）、*Directory of Indic and Buddhist Studies in Japan*（平成6年）、*Directory of Asian Language and Literature in Japan*（平成9年）、*Directory of Chinese Studies in Japan*（平成11年）を刊行した。

上記4件のデータベースは、これらの情報を更新し、文献索引データベースには検索可能なように53のテーマコードおよび14の地域コードを新たに追加し、研究者ディレクトリには研究業績を可能な限り補充したものである。

このように、学術情報センターにデータベースを提供する以前は、情報は印刷物のみを媒体としていた。NACSIS-IRを通じたオンライン検索による情報の提供は、当センターにとって歴史的な出来事であった。

これらのデータベースの利点は、言うまでもないことであるが、目的物に行き当たるためには、印刷物では最初から最後まで目を通さなければ不可能であったが、それがコンピュータ検索のよって簡便になったところである。目録にはコードを付加したことにより、専門的な関心できめ細かい検索ができるようになった。さらに、「目録所在情報データベース（図書）（雑誌）」と統合検索することによって、単行書、雑誌の所蔵図書館を同時に調べられるのも、NACSIS-IRの長所である。

4．今後の課題と展開

今後の課題は、第一には上記のデータベースの利用促進であり、第二には迅速なデータの更新であろう。

利用促進については、来年度以降NACSIS-IRが、インターネット対応サービスが可能になるということを伺った。これによって、従来のコマンド入力によるわずらわしさから解放され、使用感が格段によくなることと思われる。

データ更新については、平成11年6月から、東洋文庫のホームページ（URL: http://www.toyo-bunko.or.jp/ceacs/bib_update.html）に、目録情報の入力フォームを設置し、研究者にひろくデータ提供を求める実験をはじめた。

平成11年度から、「文献目録および研究者・研究機関名簿の編集出版」事業を解消し、新たに「研究情報データベースの作成」および「コンピュータネットワークの形成」事業を開始した。これは、国内外のアジアに関する研究情報を収集し、データベース化し、出版物、CD-ROM、学術情報センターへのデータ提供および東洋文庫のホームページでの公開など、その成果をさまざまな媒体で普及していく事業である。

さらに平成12年度以降の計画として、文献目録については、中東・中央アジアに限定せず地域を拡大し、アジア全域を対象とした人文・社会科学分野の研究情報データベースの作成を準備している。そのために情報資源の共有をめざした関係機関との連携協力を進めていこうと考えている。今後とも、関係者各位にご協力をお願いしたい。

末尾ながらデータベースの作成・公開について、学術情報センター研究主幹の内藤衛亮教授にご指導・ご支援を賜った。この場をかりて感謝申し上げます。

表示例「中東・イスラーム研究文献索引データベース」

TITL : 「セルジューク朝時代のシフナ職 - - バグダードを中心に」

TITE : #The Office of Shihna under the Great Saljuq Dynasty: The Case of Baghdad.

AUTH1 : 後藤 敦子 (著)

AUTY1 : ごとう あつこ

AUTE1 : GOTO^ Atsuko

CITN : イスラム世界

VOLN : 39・40. PAGE : pp.23-44+160. YEAR : 1993/3/30.

LANG : 日本語 Jpn

PUBP : 東京 PUBN : 日本イスラム協会

THEM1 : 031 歴史考古 : 前近代 THME1 : History, Archaeology : Pre-modern

AREA1 : 06 アラブ : イラク ARAE1 : ArabWorld : Iraq

表示例「アジア歴史研究者ディレクトリ」

NAME : 石井 米雄 NAMEY : いしい よねお

NAMEE : ISHII, Yoneo GEND : 男 GENDE : Male

BORN : 1929.10.10

AFFN : 神田外語大学 ; 京都大学 ; ユネスコ東アジア文化研究センター

学長 ; 名誉教授 ; 所長

AFFNE : Kanda Univ. of Intl. Studies; Kyoto Univ.; Centre for East Asian Cultural Studies, Toyo Bunko (Oriental Lib.)

President; Prof. Emer.; Director

ADDR : 414 千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

ADDRE : Chiba 414, Chiba-shi, Mihama-ku, Wakaba1-4-1

AREA : 東南アジア AREAE : Southeast Asia

THEM : タイ史 THME : Thai history

WORK1 : 『Millenarianism in Asian history』 Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. (東京 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) (1993)

WORK2 : (共編 : 吉川利治) 『タイの事典』 京都 : 同朋舎出版 (1993)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

平成10年度科学研究費補助金の実績報告

- ・研究代表者：柿沼 澄男（助教授）
- ・研究種目：基盤研究（A）（1）
- ・研究課題：学術研究基盤整備のための基礎的・実証的研究
- ・研究実績の概要：

本研究では、学術研究基盤整備のための基本的考え方やその量的整備水準を提案するため、実証的調査研究を行った。平成8年度～9年度には、研究環境に関するアンケート調査を実施するとともに、その調査結果の総合的な分析を中心に行った。平成10年度は、各専門分野ごとの研究基盤整備方策を検討するため、専門分野ごとの分析を行った。

1．調査の実施

研究者を取り巻く最新の研究環境の現状および課題を把握するため、研究者個人にアンケート調査を実施した。（調査票発送数約8,500，回収調査票数約5,000，回収率約6割）

調査項目：調査対象（研究者）の属性，研究費・研究設備・研究施設（研究室など）の現状と課題，その他

2．アンケート調査データの整理およびその分析

アンケート調査結果のデータを点検整理するとともに、調査結果を総括的に分析し調査報告書（総括編）を作成した。調査報告書はインターネットのWeb上でも公開した。

3．各分野別，観点別の研究環境分析

各研究分野により研究環境がどのように異なっているのかを研究するため、各分野別の分析を行った。また、研究費の配分状況が大学の種類によってどのように異なるかも分析した。

4．報告書の作成

上記の研究成果をまとめるため報告書を作成した。

- ・研究代表者：枝川 明敬（助教授）
- ・研究種目：基盤研究（B）（1）
- ・研究課題：「ポストドクター等一万人支援計画」達成後の若手研究者の養成・確保に関する調査研究
- ・研究実績の概要：

学術研究の総合的推進のための重要な柱の1つである若手研究者の養成に関しては平成8年7月の科学技術基本計画における「ポストドクター等一万人支援計画」の閣議決定以降、着実に各省庁で施策の充実が図られており、平成12年度には一万人に達する見込みである。

このため、この計画による若手研究者の養成の実績やその後の活動状況を検証し、大学院の拡充計画をも視野に入れた今後の長期的展望に立った量的・質的側面の両面を考慮した新たな若手研究者の育成・確保の在り方について研究を行った。

本年度においては、以下の項目について調査・分析を行った。

- 1) 日本学術振興会特別研究員制度などの実態と効果に関する調査・分析
- 2) 将来の研究者需要に関する調査・分析

より具体的には、1)については対象者数5,500名の特別研究員(91年度から96年度に学術振興会特別研究員であった者)に対し、現在の研究環境を始め当該人の処遇や勤務先・職階・キャリアパスについてアンケート調査を行った。

その結果、約2/3から回答があり、現在の研究者としてのキャリアパスに少なからず特別研究員の経歴が役立っていることが知れた。一方、2)については、博士課程修了者などを雇用することが予想される企業2,500余社に対しアンケート調査を行った。その結果、以前行った調査(「大学院の量的整備に関する調査研究」1998)において予想された研究者需給見込みを大幅に変更する必要はなく、その後の経済状況を勘案しても一部に需給バランスが崩れることがあるもののおおよそ釣り合っていることが知れた。

- ・研究代表者：丸山 勝巳(教授)
- ・研究種目：基盤研究(B)(2)
- ・研究課題：人文科学系の研究と情報流通を支援するための電子資料館システムの研究
- ・研究実績の概要：

資料の収集や整理に多大の労力を要する人文系研究の支援と情報流通のために、データベース構築法および検索閲覧サービスシステムを検討し、サービスシステムを構築した。本システムは国文学研究資料館の『電子資料館実験』として実験公開しており(<http://manyo.nijl.ac.jp/infocenter.html>)、使いやすさと高速検索で国文学研究者には好評を得ている。

(1) データベース内容の構築環境

全文テキスト型のデータベースに関しては、SGMLによる構造化を採用し、国文学者がパソコン入力した簡明なテキストファイルを、計算機でSGMLテキストファイルに自動変換している。巨大でデータ間に複雑なハイパーリンクを有するデータベースの構築に関しては、オブジェクト指向データベースシステムを開発し、簡明なGraphical User Interfaceでデータベース構築を行えるようにした。

(2) 電子資料館システム

インターネットWWW環境を利用して、以下を特徴とするシステムを開発し、二十一代集、源氏物語、国書基本データベース、その他を電子資料館実験として公開した。

SGMLテキストファイルを全文検索エンジンで検索することによる高速で簡単

- ・自在な検索

本文テキストとその原本画面との頁対応リンク

ハイパーリンクにより関連情報間を自在にトラバース可能

- ・研究代表者：丸山 勝巳（教授）
- ・研究種目：基盤研究（B）（2）
- ・研究課題：人文科学系研究向けマルチメディアデータ統合システムの研究
- ・研究実績の概要：

国文学や歴史の研究においては、著者・作品・書誌・所在の各情報が任意語から自由に検索でき、かつ関連情報に自在にトラバースができる古典籍の統合目録データベースの構築が強く望まれている。そこで、（1）内容を構築するためのDB構築システムと（2）多数ユーザにDBの検索閲覧サービスを提供する電子資料館システムを検討開発した。両システムは、今後引き続き、実際の業務に使われる予定である。

（1）DB構築システム

本統合DBは、巨大でデータ間に複雑なリンク関係を持つので、オブジェクト指向DBを使ったDB構築システムを開発した。また、Javaを用いた使い易いGraphical User Interfaceを実現し、データ入力と修正の容易化を実現した。

このDB内容をハイパーリンク付のSGMLテキストに変換する機能も実現した。

（2）検索閲覧サービスシステムとサービス実験

インターネットWWW環境を利用し、以下の特色を持つ検索閲覧サービスシステムを実現した。

SGMLテキストファイルと全文検索エンジンの活用による高速な検索。

全文検索なので、誰もが簡単に自在な検索を行える。

ハイパーリンクにより関連する情報を自在にたどれる。

本検索閲覧サービスは、インターネット上
(<http://manyo.nijl.ac.jp/infocenter.html>)で実験公開している。

- ・研究代表者：相澤 彰子（助教授）
- ・研究種目：基盤研究（C）（2）
- ・研究課題：高度ネットワーク情報フィルタリングのための情報処理技術に関する研究
- ・研究実績の概要：

ネットワークの相互接続点において、両者の違いを吸収して円滑に通信を行うために、高度な情報の中継/変換技術が必要になっている。本研究では、このような機能を「高度ネットワーク情報フィルタリング」と呼び、平成9年度から本年度にかけての2年間を用いて、その高度化に必要な要素技術を検討した。

本年度では特に、HTTPのプロキシサーバに焦点をあてて、そのアクセス統計を利用して中継サーバの最適配置や類似クライアントの自動抽出を行うための分析手法を

検討した。ここで、大規模サイトにおいては短期間であってもログファイルの量は膨大なものになることから、あらかじめ定めた数学的な情 諳 にしたがってログデータを要約することを試み、さらに、要約したデータに対して文献検索の分野で近年注目されている自動索引づけ手法LSI (Latent Semantic Indexing) を適用することで、クライアント間の類似度を求める手法を提案した。また、提案手法を用いて、実際に大規模プロキシサイトで観察されたログデータを分析し、単純な頻度に基づく方法よりも、クライアント間の類似関係を有効に抽出できることを示した。

本研究で提案した手法は、大量のデータから有用な情報を抽出するデータ発掘の前処理として用いることもできる。そこで、大量の単語を含む全文テキスト (論文) の類似度計算問題に対しても同様のデータ集約を適用して、有効性を調べた。

- ・ 研究代表者：佐藤 真一 (助教授)
- ・ 研究種目 : 奨励研究 (A)
- ・ 研究課題 : マルチメディア応用システムのための映像情報中の人物の検出・識別および情報抽出
- ・ 研究実績の概要：

映像中の顔の識別方法として、「見え (appearance) 」に基づく方法を中心に検討した。映像中の顔を検出・追跡することにより、顔シーケンスが得られる。任意の2つの顔のシーケンスの照合方法として、

- (1) 顔シーケンス中の最も正面向きの顔を選択して照合する方法、
- (2) 顔シーケンス間の「最近接対」を選択して照合する方法、

という2つの方法を提案し、ニュース映像とドラマ映像、合計10時間弱に適用した結果、最近接対を利用する照合方法がより精度の良い照合を実現していることが分かった。ついで、この照合方法を応用して、ドラマ映像に対する顔による自動索引付け手法について検討を行った。連続ドラマの第一話から、システムが選び出した数十程度の顔シーケンスに対して人手で名前を付与してやることにより、続く第二話以降の顔シーケンスに対し、70%以上の正解率で自動名前づけが実現できている。これによりドラマの自動内容理解、ドラマデータベースのための自動索引付け、ドラマのハイパーテキスト化などの応用が可能になると期待できる。

- ・ 研究代表者：片山 紀生 (助手)
- ・ 研究種目 : 奨励研究 (A)
- ・ 研究課題 : マルチメディア電子図書館のための視覚的検索システムの実現とその評価
- ・ 研究実績の概要：

本年度は、マルチメディアデータを対象とする検索システムの実現を目標とし、実験用データベースの作成と、検索システムの実装を行った。まず、実験用データベースは、アメリカ航空宇宙局 (NASA) がインターネット上で公開しているスペースシャトルの静止画像と動画像を用いて構築した。動画像についてはシーンチェンジを検出し、代表的なフレームを静止画像として抜き出して使用した。このようにして、およそ4万枚の画像を得ることができた。そして、これらの画像について、各々、色の出現頻度情報 (カラーヒストグラム) を求め、その類似性に基づいて画像を検索す

るシステムを実装した。システムの実装に当たっては、類似検索に適したインデックス構造であるSR-tree (Sphere/ Rectangle-tree) を採用し、静的構築法に拡張した上で実装した。静的構築法とは与えられたデータの集合に対して最適なインデックスを構築する手法のことであり、データが逐次追加される動的構築法と対になる構築法である。SR-treeはこれまで動的に構築されるインデックス構造として提案されており、静的構築法については検討が行われていなかった。また、動的構築法についても、直観的な考察に基づいて設計されており、その理論的根拠が明らかではなかった。そこで本研究では、まず、動的構築法の理論的根拠を解析し、次に、その結果を応用することで静的構築法を実現した。そして、その妥当性を実験用データベースで評価した結果、静的構築法を用いることで検索時の処理コストが、動的構築法に比べて70~80%に減少することが明らかになった。

来年度は、本年度構築したデータベースと検索システムを、既存のテキスト情報を対象とする視覚的検索システムに統合し、視覚的検索システムのマルチメディア情報に対する有効性を評価していく計画である。

- ・研究代表者：後藤田 洋伸（助手）
- ・研究種目：奨励研究（A）
- ・研究課題：部分的三次元化による多眼動画像の圧縮に関する研究
- ・研究実績の概要：

本年度は、多眼ステレオ画像から三次元形状を復元する方法を主に研究した。多眼ステレオ画像とは、多数の視点において撮像された画像を指し、撮像条件のキャリブレーションを施せば、三次元情報を復元することが原理的に可能なものである。多眼ステレオ画像に対する復元法は、動画像の場合にも拡張して適用できる。

三次元情報を復元するには、画像対におけるピクセルの対応関係を定めることが本質的に必要である。このための手法として様々なステレオマッチング法が知られているが、計算量が莫大になるという難点があった。本研究では、処理をハードウェア化することによって、この問題に対処した。すなわち、三次元レンダリング処理のための専用ハードウェアを用いて、マッチング処理を高速化する方法を提案し、評価した。

本研究では、多眼画像から三次元形状を復元することを目指している。一方、近年注目を集めているImage-based Renderingでは、画像を貼り合わせるなどして、形状の復元を経ずに、任意の視点における画像を生成する。同一視点に対する画像が複数存在し、かつ互いに重なり合っている場合、それらを張り合わせることによって、より高い解像度の画像を得ることが期待される。本研究の副産物として、こうした解像度向上のための手法を考案し、実現可能であることを確かめた。

本年度の段階では、三次元情報として点集合を復元するまでにとどまっている。今後の予定としては、この点集合からより高度な幾何プリミティブ（ポリゴンなど）を導出し、それに基づいて画像を圧縮する。さらに、時系列における相関関係を利用した多眼動画像の圧縮方法へと拡張し、実映像を対象とした実験・評価を行う予定である。

- ・研究代表者：北本 朝展（助手）
- ・研究種目：奨励研究（A）

・研究課題 : 画像内容素の階層モデルに基づく衛星画像データベースの内容検索手法

・研究実績の概要 :

当初計画における平成10年度のテーマは、大きく分けて以下の2点であった。

すなわち、(1) 画像データベースの基礎的なモデルとなる「画像内容素の階層モデル」に組み込むための種々の画像処理手法について、これを新規に作り出すか、または既存手法を問題領域に合わせて改良していくこと、(2) 衛星観測データを日本とタイの両方の観測拠点から収集し蓄積しながら、試験的な画像検索システムを構築すること、の2点である。これらのテーマに対する本年度の成果をまとめると以下のようになる。

(1) まず画像分類の問題については、衛星画像の特徴として「ミクセル」と呼ばれる画素の特徴に着目し、この種の画素を扱う統計的パターン認識手法として全く新しいアイデアとなる、画像分類法を提案した。次に画像内容に基づく画像検索の問題に関して、進化的計算論(遺伝的アルゴリズム)を活用した新しい画像検索法として、「画像散策法」と呼ばれる手法を新たに提案し、これがユーザの検索目的に柔軟に適応する画像検索の方法論として大きな可能性を秘めていることを示した。さらに画像表現モデルの基礎となるグラフ構造に関しても、その設計論や計算速度向上などの問題に関して、新たなアイデアを具体的に詰めている段階である。

(2) 画像データベースの対象として衛星画像を想定している以上、この衛星画像の収集は重要な問題である。まずタイで受信された衛星画像の収集に関しては、まだ試験的な段階で運用レベルには達していない。しかし衛星画像収集のためのネットワーク資源や、衛星画像を蓄積する驍入めのサーバ計算機資源については、平成10年度までにかかなり整えることができた。従って平成11年度は、衛星画像の収集を積極的に推進していきたいと考えている。また試験的な画像検索システムについても、平成11年度にはWWW上で広く公開できるよう、公開を最終目標として研究を進めていく予定である。

・研究代表者: 神門 典子(助教授)

・研究種目 : 奨励研究(A)

・研究課題 : テキストの内容構造記述用テンプレートの自動生成

・研究実績の概要 :

テキストには、その種類(ジャンル)に応じて、特徴的な構成要素があることが知られている。たとえば、学術論文では、「背景」、「目的」、「方法」、「結果」、「考察」、「結論」などであり、さらに詳細な要素を認定できる。これは、その種のテキストの利用者にとって自然な内容構成であり、テキストの主要な内容を概念間の関係を維持したまま抽出するための枠組み、すなわち「テンプレート」となり、情報検索システムの高度化、情報抽出、自動抄録などへ応用可能である。その種のテキストに特徴的なテンプレートが決まれば、それに該当する内容をテキストから自動抽出する研究はなされているが、テンプレート自体の作成は、人手で行なわれており、これが多様なテキストへのテキスト構造アプローチの適用をはばむ要因となっている。そこで、本研究では、テンプレート生成の自動化を試みる。初年度の平成10年度は基本手法の確立を目的として、以下の研究を行なった。

(1) 特徴的な構成要素の認定

日英の学術論文を対象として、特徴的構成要素の手がかり語句を自動的に認定、抽出を行ない、それを通じて、特徴的構成要素のセットの自動認定を試みた。コーパス言語学的手法を採用し、仕事量基準値によって不定長文字列を抽出し、文字列出現頻度とテキスト内の文体の差異の比較を行なった。手がかり語句は、(a)品詞情報なし、(b)品詞情報付き、(c)品詞情報のみについて検討した。

(2) 特徴的な構成要素の情報検索での有用性の検討

情報検索への応用を試みたところ、特徴的な構成要素を用いた検索は、用いないものに比べて、検索性能が32.8%向上した。手がかり語句のグループ化と構成要素間の関連性の自動分析を試みたところ、テキストにおける特徴的な手がかり語句の出現回数が少ないため、十分な成果を得ることができなかった。手がかり語句間の関係付け、他種テキストへの適用が来年度の課題である。

- ・研究代表者：杉本 雅則（助手）
- ・研究種目：奨励研究（A）
- ・研究課題：グループ活動を支援するための情報検索および情報共有システムに関する研究
- ・研究実績の概要：

今年度は、COSPEXと呼ばれるシステムの機能強化を中心に研究を進めた。COSPEXは、分散情報資源からの情報収集を支援するためのシステムであるが、ユーザによる情報の活用を支援するためには、情報収集機能の高度化を始めとして、さまざまな機能拡張が求められる。そこで、本研究では、まずユーザモデリングに関する基礎的な検討を行った。その上で、機械学習技術を応用した機能を実装することにより、ユーザとのインタラクションを通して、ユーザの検索意図を推定することを可能にした。次に、システムの情報可視化モジュールを新たに実装し、情報資源の意味的構造を可視化する機能を実現することにより、検索過程においてユーザが容易に情報発見を行えるようにした。このような機能拡張を行った上で、システムの実用性を評価するため、現在十数万件程度の大規模文書データを対象としたデータベースの構築を進めている。グループにおける情報共有のための機能の実現に関しては、いかにして過去のグループの有用な経験や知識（組織メモリ）を蓄積し、それらを後のグループや新たにグループに参加したメンバーが効率よく利用、学習（組織学習）できるかが問題となる。現在は、心理学的、認知科学的な知見を基に、システムに対しどのような機能として反映させることが可能かについての基礎的な考察を進めている。来年度は、これらの考察を基にさらなるシステムの機能拡張を進める予定である。

- ・研究代表者：根岸 正光（教授）
- ・研究種目：国際学術研究（学術調査）
- ・研究課題：電子図書館の国際的拡大と学術情報の利用形態の国際的動向に関する調査研究
- ・研究実績の概要：

電子図書館は、近年に至って多数の実用的システムが構築され、国際的に普及しつつある。こうした電子図書館の広がりには、学術情報一般の電子化をより一層促進し、これが学術情報の流通や利用形態など、全般にわたって大きな影響を及ぼしつつある。

本調査研究では、電子図書館の拡大を背景とした学術情報の国際的動向に着目し、各国における電子図書館システムなどの実態調査を始め、学術情報関連の研究開発や標準化に関する動向調査を実施し、また、学術情報の利用形態に関する比較調査、研究動向・研究評価にかかわる調査などを実施する。本研究は、これらの問題関心を念頭に、主として訪問調査の手法により調査研究を展開し、わが国の学術情報システムの国際的な位置づけと将来的な方向性を見出すこと、またその高度化と国際化に資することを目的とするものである。

本調査研究の課題は多岐にわたるが、電子図書館については、その技術的側面のみならず運営面や社会的側面も含めて、大学、出版者などに対する調査を行った。電子図書館に関連して、全文データベース、マルチメディア・データベースに関連する調査が必要で、ここではSGML/XMLやDublin Coreといった標準化の動向もあわせて調査分析した。学術情報センターの電子図書館サービスNACSIS-ELSの海外展開に関連して、海外における日本情報への需要動向把握のための調査を行った。

また、学術情報の電子化に呼応するべき学術情報一般の需要動向分析、さらに学術研究自体の動向分析のために、その手法であるビブリオメトリック的研究や科学政策の動向調査も合わせて行っている。また、情報学研究所の設立準備が進展する中、欧米での情報学研究の実態分析のための調査を実施した。本調査研究は、これらの複合的課題に対して効率的に実地調査を遂行し、その結果を調査報告書にとりまとめた。

- ・研究代表者：猪瀬 博（所長）
- ・研究種目：国際学術研究（学術調査）
- ・研究課題：超高速国際研究ネットワークの相互接続と相互調整に関する学術調査
- ・研究実績の概要：

米国NSFがvBNS（very highspeed Backbone Network Service）の運用を開始して以来、世界の研究ネットワークは超高速化している。1998年には、新たにInternet 2プロジェクトがAbileneと称する超高速ネットワークの稼働を開始し、学術情報センター並びに学術情報ネットワークに参加する大学などの研究機関がInternet 2プロジェクトに参加できるように、相互の協力を締結する準備を進めている。同時にG7サミットにて承認された「超高速研究ネットワークの相互接続と将来の相互調整のための国際共同研究」（通称GIBN：Global Interoperability of Broadband Networks）の活動が定着し、国際的に超高速研究ネットワークの相互連携が加速している。本年度は、学術情報ネットワークと北米の研究ネットワークの相互接続が実施の段階に入り、また従来にない高速で学術情報ネットワークと欧州の接続が検討された。本件については、実施に向けた最終調整を残す段階に至っている。

これら一連の共同研究を実施し、また進行するために、研究分担者は以下の国際学術研究を行った。

1．共同研究者など（計、趙）は、アジアにおける国際共同研究を進めるために、中国科学院との研究打ち合わせを行い、相互に、ネットワークを用いた学術研究の実態を把握した。

2．共同研究者（浅野）は、国際研究ネットワークの相互調整会議であるCCIRNに日本を代表して出席し、調整を実施した。

3. 共同研究者（浅野）は、先進諸国間の情報通信政策を協議するOECD/ICCP（情報コンピュータ通信政策委員会）に日本代表並びに副議長として出席し、情報通信政策の取りまとめを実施した。

4. 共同研究者など（松方，阿部，浅野）は、Internet 2 プロジェクトの会合に出席し、相互の協力を締結する準備を行った。

5. 共同研究者（趙）は、米国にて超高速ネットワークの研究発表と、研究交流を実施した。

6. 共同研究者（魚瀬）は、英国にて学術情報ネットワークと欧州研究ネットワークの相互接続の協議を実施した。

7. 共同研究者（松方）は、仏国にて高エネルギー物理学研究ネットワークの将来構想を協議した。

以上の研究をもって、当初の計画を達成した。

- ・研究代表者：小野 欽司（教授）
- ・研究種目：国際学術研究（共同研究）
- ・研究課題：学術情報の国際的流通共有システムに関する実証研究
- ・研究実績の概要：

学術情報の国際的な流通と共有を促進するため、平成10年度もタイとの間の国際リンクを有効活用するための情報流通方策、共有方式について共同研究した。その一貫としてAITにおいて本研究に関する国際ワークショップ（WAINS-5）を開催した。ワークショップでは、日・タイ両国の研究者で共同研究されているテーマについて討論した。

以上を要約すると、次のようになる。

- 1) NACSISタイプロジェクトのもとに国際共同研究を推進した。ワークショップ（WAINS-5）を実施し、研究状況について報告した。
- 2) 上記に係る研究成果発表をProceedingsとしてまとめて発行した。
- 3) 国際インターネット接続によるアプリケーションの実証研究、特にインターネットビデオ会議により共同研究の促進に役立てた。
- 4) タイからのNACSIS資源の利用促進をはかるため、ネットワークの遠隔教育をした。
- 5) 日米文化教育会議カルコンにおいて、情報アクセスの主査として日米情報アクセスに関する調査、提言をした。
- 6) アジア地域における将来の学術情報交換システムの形成に関して、タイ以外の国々との学術研究交流の方策を検討した。
- 7) 日仏間におけるハイパメディア文化資産の共有のためのデータベース研究を行った。

- ・研究代表者：井上 如（副所長）

- ・研究種目 : 国際学術研究 (共同研究)
- ・研究課題 : 日本情報の国際共有に関する研究
- ・研究実績の概要 :

日本情報の国際共有として、海外で収集・整理・蓄積・利用されている日本に関する学術情報を、現実の、および仮想的なデータベースとして構築し、共有化するについて、情報技術的課題、国際的な規模における社会システムとしての運営上の課題を探究する。海外の専門家による分析評価、意見・情報交換、現地における事情聴取、東アジアにおける情報技術国際化課題に関する探究などを含む。

本研究の目的は「日本情報の国際共有として、海外で収集・整理・蓄積・利用されている日本に関する学術情報を、現実および仮想的なデータベースとして構築し、共有化する」ところにある。この課題をめぐって、平成10(1998)年度には3組7名の招へいと13件延べ13名の派遣を実施した。

欧州、米国、中国などの学術図書館が収集する日本語コレクションについて、その所蔵情報を学術情報センターが維持する総合目録データベースに登録するための技術課題、運営課題について実地調査し、部分的には接続試験、利用実験などを進めた。また既存の接続館に対する運営効率の向上について協議した。

この作業を基盤として、学術情報の国際的共有をとりまく学術政策、学術情報政策、学術情報の利用行動などについての討議を訪問先において、また、研究者・専門家を日本に招へいして討議し、本研究に参加するものの知見を深めた。

初年度の経験・知見から、欧州(特にドイツ)における日本情報アクセスの可能性の実地調査(もしくは日本のデータベース・プロバイダによるデモンストレーション)の必要性、中国における日本語コレクション情報の収集体制整備の可能性、米国学術情報コンソーシアムとの連携の可能性および課題などが明らかとなった。

- ・研究代表者 : 上野 晴樹 (教授)
- ・研究種目 : 国際学術研究 (共同研究)
- ・研究課題 : 高次サービスロボットの実現技術に関する共同研究
- ・研究実績の概要 :

本年度の研究は、同一テーマで96-97年度に共同研究を行ってきたので、実質的には3年間に渡る国際共同研究の最終年度の研究であった。我々の目標は、日米の両グループがそれぞれ役割を分担しかつ協力して、次世代型の自律型知的サービスロボットの概念と実現技術を研究し、この分野にブレークスルーをもたらす提案を行い、かつデモシステムを通して研究成果を社会に示すことであった。

日本側は、8自由度の多関節アームと、178個の触覚センサをもつ17自由度の5指ハンドからなる人型ロボットアームHARISを開発し、ワールドモデルと呼ばれる知識ベースを中核として、モデルベース3Dビジョン、知的スケジューラ、知的アーム・ハンドコントローラ、自然言語インタフェースなどのソフトウェア技術を開発し、この研究のために開発したプラットフォームであるフレーム型汎用知識工学環境ZERO++によって統合化した。

米国側では、空気制御によるゴム製のデュアルソフトアームと4自由度の二眼カメラをもつ知的サービスロボットISACを開発し、ファジー制御、ビジュアルサーボ技

術，顔面トラッキング技術，2アーム協調制御システムなどのソフトウェア技術を開発し，この研究のために開発した分散エージェント指向プラットフォームIMAによって統合化した。

それぞれのロボットシステムが実験システムとして成功したが，日本側が認知科学的アプローチであるのに対して，米国側はセンサーベース型アプローチを採用するというように，対照的なコンセプトであった。共同研究の最終作業として，相互のプラットフォームを交換・結合し，両者の長所を生かす実験，つまり知識処理による計画型制御とセンサーベースによる行動型制御を統合する試みを行なった。

成果の大部分は既に国際会議やジャーナルで公表している。

以上，目的は十分に達成することが出来，かつこれからの国際共同研究のあり方に関して貴重な経験となった。

- ・研究代表者：小野 欽司（教授）
- ・研究種目：特別研究員奨励費
- ・研究課題：ATMネットワークに基づく活性的ハイパーメディア処理システムの研究
- ・研究実績の概要：

本研究の目的は新しい概念のハイパーメディア情報の国際的な流通・共有システムの研究を推進するため，ATMやインターネット上でのアクティブ・ハイパーメディア情報の効率的な処理と蓄積アーキテクチャのモデリングと評価を行うことである。

そのためにVOD（ビデオオンデマンド）などマルチメディア情報蓄積サーバと検索システム実現の要素技術となるデータベースの性能評価，3次記憶管理システムの評価，データベース管理システムのコスト推定に関する研究を実施した。

本研究ではテキスト，音声，ビデオなどのマルチメディアの蓄積サーバと処理に関する研究を3つのサブテーマについて行った。

1．ニューラルネットワークの適用によるデータベースシステムの性能評価。この研究は1996年の10月から1997年の3月まで行われた。この期間中に人工衛星画像の分散データベース配送とその記憶サブシステムに関連する研究も進めた。

この成果は，国際会議で発表するとともに，情報処理学会の論文誌に掲載された。

2．ビデオ・オン・デマンドサーバー（VOD）における第3次記憶システム上の連続データの記憶管理。この研究は1997年4月から1998年3月まで行われ，具体的な蓄積アーキテクチャモデル提案と性能評価をし，IEICEの論文誌に発表した。

3．オブジェクト指向におけるユーザー定義方式とデータベース管理システムのコスト推定。この活動は，1998年4月より同年7月まで行われた。最終的な結果を得るまでに至らなかったが，国際会議などで中間成果を発表した。

- ・研究代表者：上岡 英史（助手）
- ・研究種目：特別研究員奨励費
- ・研究課題：日露共同気球実験による銀河宇宙線の加速・伝播機構の研究

・研究実績の概要：

本年度の研究実績として、(1) 日露共同気球実験（RUNJOB Experiment: RUssia-Nippon JOint Balloon Experiment）、(2) 長時間気球実験のための技術開発、(3) 新しい宇宙線検出器の開発、に分けて報告する。

（１）日露共同気球実験

昨年度までに既に6機の気球実験を終え、また、解析にかかわる技術的な問題がほぼ解決できたので、念願の組成別宇宙線エネルギースペクトルを求めることに成功した。これらの結果を今年度春に開催された国際会議ISTSで発表し、また、夏に開催された国際会議COSPARにおいても発表した。近々“Advances in Space Research”に掲載される予定である。さらに、秋に日露共同気球実験シンポジウムをモスクワで開催し、原子核乾板の顕微鏡画像解析による宇宙線電荷決定法に関する発表を行なった。現在日露共同でこのプロジェクトに関する初めての学術論文を作成中であり、両国で研究会を開き情報交換、議論を頻繁に行っている。来年度はこのシリーズの気球実験は最後の年で4機の気球観測を行うことになっており、現在その準備にとりかかっている。これによって、総計10機の気球観測を行ったことになり、統計量的には信頼できる高エネルギー領域の宇宙線エネルギースペクトルを算出することができると思われる。

（２）長時間気球実験のための技術開発

長時間気球実験を行うために昨年度から始めたオーバー・プレッシャー気球の開発を引き続き行い、今年度も5月に宇宙科学研究所三陸大気球観測所にてテスト実験を行った。多少の問題はあるが、長時間飛行を行うに当たっての技術開発としては成功を収めた。この結果についても今年度夏に開催されたCOSPARにて発表を行なった。

もう一つの気球工学的技術として、オートバラスト・コントローラーの開発を行っている。これは気球高度変化を最小に押さえるためのバラスト投下機構であり、ハードウェアの制作に関してはほぼ終了している。現在、実際に気球に搭載するための準備およびシミュレーション検討を行っている。

（３）新しい宇宙線検出器の開発

100日間程度の長時間気球実験、さらには、数年間にわたる人工衛星やスペース・ステーションでの実験に耐えうるカウンター系宇宙線観測システムの開発についてであるが、発注していたシリコン検出器のサンプルが出来上がったので、それをを用いたデータ収集システムを制作している。特に、ハードウェアの設計を中心に行い、来年度早々にはプロトタイプが完成する予定である。また、シリコン検出器の一様性をテストするため、7月に放射線医学総合研究所、理化学研究所で加速器による放射線照射テストを行った。現在、そのデータをもとに初めの観測ターゲットである高エネルギー宇宙線超重核成分用検出器の開発を検討しているところである。

（研究開発部）

長岡工業高等専門学校における学術情報センター システムの利用

長岡工業高等専門学校学生課図書係

久保田 昌代

1．図書館の特色

高等専門学校は、中学を卒業後5年間の一貫した技術教育に重点を置く高等教育機関として昭和37年に設置された。本校は、昭和36年に設置された長岡工業短期大学を前身とした工業高専（機械・電気・電子制御・物質・環境都市工学科）である。学生数は1学年200名、全校1,000名である。現在では、卒業生の約6割が大学の3年次に編入し、約4割が就職する状況である。このように図書館のサービス対象者は、中学校を卒業したばかりの1年生から、専門教育を受け卒業研究に励む5年生、そして教官までと幅広くなっている。蔵書も低学年のための親しみや甞れい図書や高学年のための専門書など多岐にわたっており、読書の楽しみ・学習・研究活動などに対応するよう心がけている。

2．学術情報センターの利用および雑感

現在、図書館で利用しているサービスは、NACSIS-IR・NACSIS-CAT・NACSIS-ILLである。また、数名の教官がNACSIS-IR・NACSIS-ELSを利用している。現在、図書館員は3名でカウンター業務・受入業務・目録業務などすべての図書館業務を行うため、学術情報センターのサービス利用は不可欠のものとなっている。特にCAT・ILLの利用は、業務の省力化やサービスの向上に役立っている。ILLには平成8年に加入したが、年々文献複写依頼の件数が増加しており、（NACSIS-ILLを利用しての依頼件数は、平成8年度694件、平成9年度961件、平成10年度1,186件。）所蔵調査にかかる時間、論文入手までの時間が短縮し、図書館員および利用者ともに大変助かっている。複写依頼の受付については、年に数件しかなく心苦しいが、現物貸借で依頼を受け付けた時などは、お役に立つことができうれしいこともある。当館の場合、CATにしてもILLにしても、相互協力の恩恵を受けることの方が格段に多い。そして、正確できめ細かい書誌に感激し、迅速な複写物の到着に心から感謝していることをおわかりいただきたいと思う。

3．今後の課題

平成5年からCATに接続し登録してきたが、それ以前の蔵書（カード目録とコンピュータ化を併用）については、通常の業務の合間に遡及入力しているため登録が遅れている。今後は、CATを最大限に利用させてもらい、登録の増加を図り相互協力に貢献できるように努力をするつもりである。また、NACSISサービスのPR・利用促進につとめていきたいと考えている。

NCNP精神保健研究所図書室における 学術情報センターシステムの利用

NCNP精神保健研究所図書室

司書 高橋 周子

1. はじめに

当研究所は、昭和27年1月アメリカNIMHをモデルに厚生省の附属機関として設立され、精神衛生に関する諸問題について、学際的立場から精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学などの各専門家による総合的・包括的研究を行うほか、国、地方公共団体、病院などにおいて精神衛生業務に従事する者に対して、精神衛生各般にわたる必要な知識および技術の研修を行い、資質の向上を図ることを目的としている。（要覧より）

2. 図書室の機械化

図書館業務全般を平成元年にNECのLICS-Sで機械化した。平成10年からは、所内のLANから図書館システムにアクセス出来るようになった。しかし、サーバーの負荷などの問題で、現在外部へは公開していない。

3. 学術情報センターシステムの利用

さまざまな機関で、多種多様なデータベースが作られている現在、当研究所でもNACSIS-IRはもちろんのこと、JOIS、DIALOGなどのデータベースに接続し文献検索を行っている。このような検索ツールを手に入れたことにより、文献複写の依頼件数は飛躍的に増加した。

当研究所がNACSIS-ILLに参加したのは、平成4年からである。それ以前は従来の冊子体目録と郵送で文献複写依頼に対応していた。しかし、冊子体の発行の頻度などから、新しい雑誌の所蔵館を探すことが出来ないなどの不便があった。現在ではNACSIS-ILL利用により年間複写依頼約2,000件を処理している。また、複写受付件数も増加し、年間約700件に上っている。ただ、厚生省の機関であるということから、FAX対応して頂ける所が少ないのが、目下のところの悩みである。

4. トピックス

最近、1950年代のAMERICAN JOURNAL OF PSYCHIATRYに載っている薬の広告のページを撮影したいという問い合わせがあった。ところが、当図書室では、製本時に広告のページを破棄してしまうため、依頼に応じることが出来なかった。図書館では、製本時に広告のページを破棄してしまうところがほとんどであると思う。しかし、このよ謔、に不要と思われた部分も歴史的資料的価値があることから、原型のまま保存しておくところを確保しておくことが必要ではないだろうか。

学術情報センターシステム利用の継続手続き

平成11年度の継続手続きは、各サービスシステムの機種更新およびセンター移転作業に伴い以下のように簡略化した方法で行いますので、ご了承ください。

1．情報検索サービス・電子メールシステムの継続手続き

原則、申請内容に変更のない利用者は今年度に限り継続手続き不要で、平成12年度も引続きご利用頂けます（APPLYコマンドによるオンライン申請は不要です）。変更がある場合は、「学術情報センターシステム利用申請書」に変更内容を記入して申請してください。なお、期間は11月下旬～12月中旬で受け付ける予定です（例年〔2月上旬～3月中旬〕より早くなっておりますのでご注意ください）。詳しい申請方法・期間などについては利用者の方に11月中旬に郵送する「継続案内」に記載する予定ですので、そちらをご覧ください。

2．電子図書館サービスの継続手続き

原則、申請内容に変更のない利用者は今年度に限り継続手続き不要で、平成12年度も引続きご利用頂けます。変更がある場合は、「学術情報センター電子図書館サービス利用者登録申請書」に変更内容を記入して申請してください。

（共同利用課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

接続ニュース

前号以降，新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は，以下のとおりです。

(平成11年7月23日現在)

No.	機 関 名	接続日	No.	機 関 名	接続日
674	山梨県立看護大学	1999.4.21	682	長崎県立大学	1999.6.22
675	大阪国際女子大学	1999.4.21	683	京都薬科大学	1999.6.22
676	尚絅大学	1999.5. 6	684	桐蔭横浜大学	1999.6.22
677	仁愛女子短期大学	1999.5. 6	685	群馬県立医療短期大学	1999.6.22
678	阿南工業高等専門学校	1999.5. 6	686	東北文化学園大学	1999.7. 9
679	青森県立保健大学	1999.5.24	687	銀杏学園短期大学	1999.7. 9
680	聖母女学院短期大学	1999.6. 1	688	四日市大学	1999.7.13
681	国立循環器病センター	1999.6.14			

この結果，参加機関数は，国立大学99，公立大学49，私立大学323，共同利用機関14，

短期大学75，高等専門学校45，その他83，合計688機関となりました。

(共同利用第一係)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

MATHデータベースの一部サブファイルのサービス終了

MATHデータベースに収録されているAssociation for Computing Machinery (ACM) (<http://www.acm.org/>) の2つのサブファイルは、その作成機関である米国数学会からの通知に基づき、平成11年12月末をもってサービスを終了します。その他のMathematical Reviewsなど5つのサブファイルのサービスは継続します。

- CR (Computing Reviews)

(参考 : <http://www.acm.org/reviews/Current.html>)

- GCL (ACM Guide to Computing Literature)

(データベース課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

平成11年度学術情報センターサービス利用者説明会の報告

平成11年度に目録所在情報サービスの未接続機関を対象とした「目録所在情報サービス利用説明会」、情報検索サービス・電子図書館サービスの利用を検討している大学などの研究者、図書館職員を対象とした「情報検索サービス・電子図書館サービス利用説明会」をそれぞれ開催いたしました。各説明会の参加機関数および参加人数は下記のとおりです。

1. 平成11年度目録所在情報サービス利用説明会参加機関および参加人数

開催日	参加機関数	内 訳				参加人数
		大 学	短 大	高 専	そ の 他	
第1回 5 / 14	11	5	4	0	2	13
第2回 6 / 14	10	6	2	1	1	12
第3回 6 / 28	4	1	2	0	1	6
第4回 7 / 16	11	6	1	0	4	16
合 計	36	18	9	1	8	47

2. 平成11年度情報検索サービス・電子図書館サービス利用説明会参加機関および参加人数

開催日	参加機関数	内 訳				参加人数
		大 学	短 大	高 専	そ の 他	
第1回 5 / 17	12	6	3	0	3	13
第2回 7 / 21	15	8	1	0	6	16
合 計	27	14	4	0	9	29

(共同利用第一係)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

電子図書館サービスの実施状況

電子図書館サービスのソフトウェア提供状況

UNIX用電子図書館専用クライアント・ソフトウェア

製 品	オペレーティングシステム	提供ソフトウェア
SUN Microsystems 社製 または同互換機	Solaris用(OSにSolaris 2.4, Solaris 2.5 を使用している場 合)	elb-solaris 2.4.tar.Z(Ver3.2:平 成11年4月6日公開版)
	Solaris用(OSにSolaris 2.5.1以上 を使用している場合)	elb-solaris 2.5.1.tar.Z(Ver3.2:平 成11年4月6日公開版)
	Solaris SOCKS用(OSがSolaris 2.4, Solaris 2.5, Solaris 2.5.1で ファイヤーウォールのProxy にSOCKSを使用している場合)	elb-solaris2.4-socks.tar.Z(Ver3.2: 平成11年7月末日現在予定)
NEC社製EWS4800	EWS4800用 (OS:EWS-UX/V4.2MP)	elb-ews.tar.Z(Ver3.2:平成11年4 月6日公開版)
	EWS4800 SOCKS用(OS がEWS-UX/V4.2MPでファイ ヤーウォールのProxyにSOCKS を使用している場合)	elb-ews-socks.tar.Z(Ver3.2:平 成11年7月末日現在予定)
DOS/V パーソナル コンピュータ	DOS/V パーソナルコンピュ ータ用(OSにSolaris 2.5.1 for x86 を使用している場合)	elb-solaris-x86.tar.Z (Ver3.2:平 成11年4月6日公開版)
Hewlett Packard社 製HP9000または同 互換機	HP9000用(OSにHP-UXを使用 している場合)	elb-hp.tar.Z(Ver3.2:平成11年4 月6日公開版)

* 専用クライアント・ソフトウェアでは、電子図書館サービスに収録されている雑誌の他、学術情報センター以外の他のZ39.50サイトの論文を検索する機能がありません。

パーソナルコンピュータ用電子図書館プラグイン・ソフトウェア

製 品	ブラウザ	提供ソフトウェア
Microsoft Windows95, Windows98 または Microsoft WindowsNT4.0 以上 備考：メモリ32Mbyte以 上を推奨	Netscape Navigator/Communicator Version3.0以上 また はMicrosoft Internet Explorer Version3.02以上 (Version4.0 では動作に不具合が出るた め使用できません)	Windows 対応プラグイン・ ソフトウェア (平成11年4月6 日公開版)

Apple社製のPower MacintoshまたはMacOS搭載機 漢字Talk7.XまたはMacOS7.6以上 備考：Power Macintoshに対応（68k Macintoshでは使用できません）	Netscape Navigator/ Communicator Version3.0以上 またはMicrosoft Internet Explorer Version4.0以上	Power Macintosh対応プラグイン・ソフトウェア（平成11年8月末日現在予定）
---	---	--

* WWWブラウザと学術情報センター電子図書館プラグイン・ソフトウェアとの組み合わせの使用となります。このプラグイン・ソフトウェアでは、前日までの使用料金が確認できる機能が追加されています。

* 各ソフトウェアの最新提供状況及び入手については、次のURLをご覧ください。

URL:<http://www.nacsis.ac.jp/els/els-j.html>

（データベース課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

NACSIS-IRデータベース増加状況

平成11年 8月20日現在

No.	データベース名称	収納件数	前回収納件数	備考
1	学会発表データベース(全分野)	417,654	416,998	6/14追加更新
2	学術論文データベース(全文) 第一系(電子関連)(抄録)	7,210 10,163	6,124 9,010	8/3追加更新
3	学術論文データベース第二系(化学 関連)	26,217	24,256	8/5追加更新
4	学術雑誌目次速報データベース	215,839	202,399	毎日更新 8/6追加更新
5	科学研究費補助金採択課題データ ベース	143,882	103,362	7/12追加更新
6	雑誌記事索引データベース	2,153,412	2,064,144	隔週更新 8/5追加更新
7	データベースディレクトリ	2,789	2,428	8/9追加更新
8	RAMBIOS	13,652	10,309	6/30追加更新
9	日本独文学会文献情報データベース	29,877	29,042	6/21追加更新
10	スラブ地域文献情報データベース	7,679	9,497	5/25全件更新
11	文化財科学文献データベース	20,489	17,413	8/10追加更新
12	中東・イスラーム研究文献索引データ ベース	18,205	15,816	5/21追加更新
13	Life Sciences Collection PULS Marine Biology and Bio Engineering	2,110,921	2,072,158	月次更新 最終更新 日7/28
14	MathSci	1,987,159	1,971,855	月次更新 最終更新 日8/11
15	COMPENDEX PLUS	4,001,505	3,957,701	月次更新 最終更新 日8/5
16	Harvard Business Review	3,057	3,033	隔月更新 7/30追加更新

17	EMBASE	5,135,003	5,015,469	週次更新 最終更新 日8/12
18	目録所在情報データベース（図書）：書誌 ：所蔵	4,261,158 39,839,387	4,138,179 38,047,780	週次更新 最終更新 日8/16
19	科学技術関係欧文会議録データベース	56,379	55,646	7/27追加更新
20	JPMARC	2,105,974	2,075,864	月次更新 最終更新 日8/2
21	LCMARC（Bookes）	4,690,238	4,628,936	週次更新 最終更新 日8/3
22	日本の医学会会議録データベース	35,406	34,168	7/28追加更新
23	国会図書館洋図書目録データベース	186,801	184,068	8/5追加更新
24	学術関係会議等開催情報	23,422	21,099	7/7追加更新
25	学協会集会スケジュール（日本工学会編）	11,895	11,441	7/1追加更新

* 現在サービス中のデータベースは全部で59種類あります。データベースの一覧は、URL（<http://www.nacsis.ac.jp/ir/dblist-j.html>）でご覧いただけます。

（システム管理課）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

NACISIS-CATデータベース構築状況

平成11年5月14日現在

データベース名称		収納件数	備考	
総合目録データベース	図書	書誌	4,269,409	
		書誌(遡及)	701,914	
		所蔵	40,878,468	
	雑誌	書誌	223,330	
		所蔵	3,326,791	
	著者名典拠		1,078,739	
	統一書名典拠		17,297	
	和雑誌変遷マップ		6,182	
	洋雑誌変遷マップ		18,640	
参照ファイル	LC/MARC	洋図書書誌	5,996,549	1968年1月～1999年7月
		洋雑誌書誌	807,960	1973年1月～1998年12月
		非文字書誌	268,147	1973年1月～1993年12月
		洋書著者名典拠	3,338,459	1977年1月～1999年8月
		洋書統一書名典拠	270,105	1977年1月～1999年7月
	JP/MARC	和図書書誌	2,168,082	1868年1月～1999年7月
		和雑誌書誌	100,582	1968年8月～1996年1月
		和書著者名典拠	325,315	
	UK/MARC	洋図書書誌	1,792,566	1950年1月～1999年1月
	DN/MARC	洋図書書誌	3,372,190	1945年4月～1998年10月
	TRC/MARC	和図書書誌	766,028	1985年4月～1999年8月
	GPO/MARC	洋図書書誌	456,657	1976年1月～1999年6月

(システム管理課)

平成11年度新NACSIS-IR対応（地域）講習会の案内

NACSIS-IR（新IR対応）の操作方法を広く知っていただくため、利用説明会および操作体験講習会を以下の要領で開催します。なお、「教育研修事業要項」発送先には、同内容の通知文書を既にお送りしています。

受講対象者

原則としてNACSIS-IRの利用資格を持つ方。

申込方法

すでに発送しました通知文書に添付された申込用紙をFaxで送るか、または、研修課ホームページ <http://www.nacsis.ac.jp/hrd/welcome.html>からお申し込みください。

参加の可否を研修課からご連絡いたします。

カリキュラム

- ・ NACSIS-IR（新IR対応）概要
- ・ NACSIS-IR（新IR対応）Web版基本操作の説明
- ・ NACSIS-IR（新IR対応）telnet版基本コマンドの説明
- ・ NACSIS-IR（新IR対応）体験実習
- ・ 電子図書館（NACSIS-ELS）概要及びデモンストレーション
- ・ NACSIS-IR，NACSIS-ELS利用申請方法の説明

日程

開催日時 (いずれも13:30-16:00)	会場	受講定員	申込締切
平成11年10月1日 (金)	九州大学附属図書館	50名	9月20日
平成11年10月5日 (火)	名古屋大学情報メディア教育センター	50名	
平成11年10月7日 (木)	東京大学附属図書館	50名	
平成11年10月13日 (水)	徳島大学総合情報処理センター	40名	
平成11年10月29日 (金)	岡山商科大学第3パソコン教室	40名	
平成11年11月5日 (金)	立命館大学有心館	80名	

平成11年11月12日 (金)	金沢大学総合情報処理センター	50名	10月20日
平成11年11月16日 (火)	琉球大学附属図書館	50名	
平成11年11月18日 (木)	東北大学附属図書館	50名	
平成11年11月25日 (木)	京都大学附属図書館	50名	

その他

- ・会場案内図は、通知文書または、研修課ホームページでご確認ください。
- ・各会場とも、お車での来場は御遠慮ください。
- ・問い合わせ先：教育研修部研修課指導第二係 Tel: 03-3942-6946
Fax:03-5395-7477

E-mail: edu@hrd.nacsis.ac.jp

(研修課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

平成11年度学術情報センター 「情報処理軽井沢セミナー」終了報告

学術情報センターでは、学術研究活動を支援する大学職員の情報リテラシー研修の一環として、平成11年7月12日から7月16日までの5日間、国際高等セミナーハウス（長野県軽井沢町）を会場に標記のセミナーを実施しました。このセミナーはインターネット環境における最新の情報処理技術を習得することを目的にしたもので、今年度は「Linux活用」をテーマに取り上げました。

本センター研究開発部の橋爪宏達教授、後藤田洋伸助手、相原健郎助手が、講師として下記研修生の指導にあたりました。さらに（株）パーソナルメディアより石川千秋国際室室長を招き、セキュリティ、バーチャルマシン関連の特別講義も行われました。カリキュラムは、Vine Linuxのインストールから始まり、マシンの分解・組立て、各種サービスの解説など、ネットワークサーバの設定を中心に、幅広い講義・実習が行われました。また、研修生は、毎日カリキュラムに沿った課題を与えられ、グループで解決、翌日発表会を行いました。

Linuxの導入を検討している機関が多かったため、開催時期が良くかつ最新トピックが取り上げられていて非常に有意義だった、と研修生には好評でした。また、ネットワーク管理者である参加者同士の情報交換も盛んに行なわれていました。

本セミナーの会場となった国際高等セミナーハウスは、平成9年に竣工された施設で、セミナー室、研究室のほか宿泊室や食堂を備えており、短期のワークショップやセミナー、国際会議などの他にも、今回のような合宿形式での中期のセミナーなど幅広く活用されています。

研修生

氏 名	所 属
森脇 幸伸	北見工業大学情報処理センター
小坂麻衣子	北海道大学附属図書館
青木 正文	群馬大学工学部
近藤 努	筑波大学図書館部
徐 浩源	横浜国立大学総合情報処理センター
後藤美由紀	三重大学附属図書館
赤澤 久弥	京都大学附属図書館
吉田 朋彦	広島大学総合情報処理センター
島本 勝	熊本大学総合情報処理センター
吉田 恭浩	宮崎医科大学総務部
中野 裕晶	北陸先端科学技術大学院大学研究協力部

カリキュラム

第1日		Vine Linuxインストール, カーネル再構築, PCMCIAカード	
第2日	サーバマシン分解・組立, Slackwareインストール, カーネル再構築	NFS server, Automount, Samba	課題
第3日	NIS, BIND	PPP, DHCP, Qmail, POP	課題
第4日	自由演習	セキュリティ, 代替OSの紹介 (B-right/V, BeOS, など), バーチャルマシン (VMware)	課題
第5日	RAID, ディスク性能測定	まとめ	



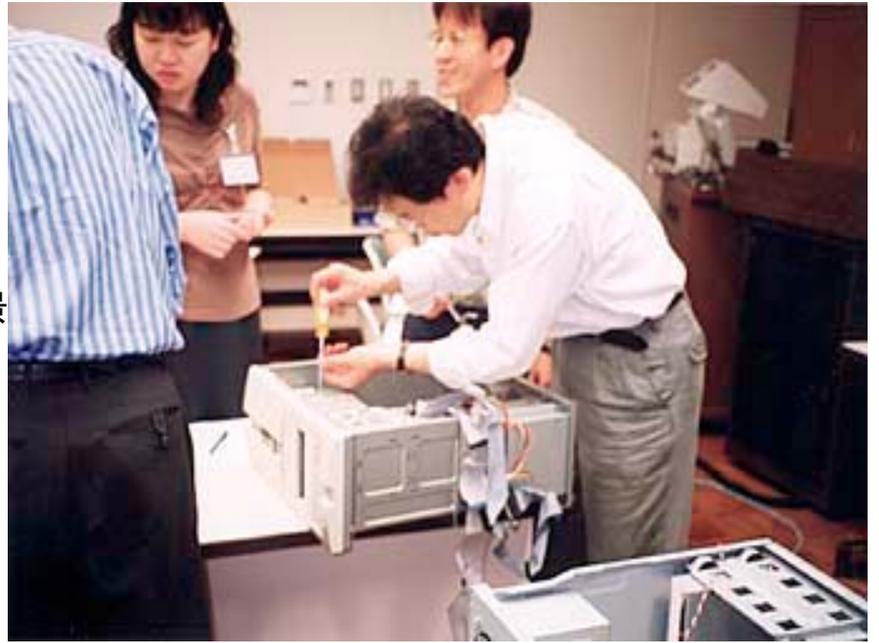
講師, 研修生

講義





実習風景



実習風景

(研修課)

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

科学実験教室「文部省学術情報センター見学会」 の報告

小・中学生を対象にした科学の啓発活動である科学実験教室（電子情報通信学会と科学技術館サイエンス友の会の共催）の「文部省学術情報センター見学会」が、昨年に引き続き、平成11年8月9日（月）に実施されました。

研究開発部長小野教授の挨拶の後、研究開発部相澤助教授による「科学者はどうやって情報を集めるの？」と題した講演を行い、さらに、電子情報通信学会による学会の活動内容や、当センターがサービスする電子図書館サービス（NACSIS-ELS）についての紹介も行いました。引き続き、研究開発部井上助手が自作のWWWクイズとその背後にあるプログラミングの概念を解説し、最後に各参加者が小・中学生を対象としたホームページでWWWサーフィンを体験しました。



見学会風景



（研修課）

平成11年度学術情報センターシンポジウムの開催案内

平成11年度学術情報センターシンポジウムを次のように開催します。

1. テーマ 21世紀に向けての学術情報サービス
2. 内 容 これからの図書館情報システム
- 学術情報センター 研究開発部教授 宮澤 彰
- 国立国会図書館 電子図書館構想と将来計画
- 国立国会図書館 電子図書館推進室長 田屋 裕之
- 電子図書館と図書館の将来
- 大阪市立大学 学術情報総合センター教授 北 克一
- 電子化ジャーナルの開く新しい世界 - 二次元より三次元空間へ
- エルゼビア・サイエンスのケースを例として
- エルゼビア・サイエンス(株)代表取締役 深田 良治
- 図書館・文書館・博物館 催し物と見せ物の世界
- 学術情報センター 名誉教授 井上 如

* 両会場ともに同じ内容で実施します。

3. 日時・場所 (7. 会場案内図参照)

- ・ 関西会場 平成11年10月15日(金) 10:00~16:30(開場9:30)

国立京都国際会館(京都国際会議場) 会議場A(定員370名)
(京都市左京区宝ヶ池)

交通: 地下鉄烏丸線「国際会館」駅 徒歩3分

- ・ 東京会場 平成11年11月2日(火) 10:00~16:30(開場9:30)

財団法人日本教育会館一ツ橋ホール(定員780名)
(東京都千代田区一ツ橋2-6-2)

交通: 営団地下鉄半蔵門線, 都営地下鉄新宿線, 都営地下鉄三田線

「神保町」駅 徒歩5分

営団地下鉄東西線「竹橋」駅, 「九段下」駅 徒歩5分

4 . 参加費 無料

5 . 申込み方法 参加をご希望の方は、WWWホームページからお申し込みいただくか、電子メール、FAXまたは葉書に 参加会場名、参加者氏名、勤務先または所属機関の名称と所在地、職名、連絡先電話番号およびFAX番号を明記の上、学術情報センター教育研修部研修課企画係へお申し込み下さい。

* 先着順に受け付け、申込みが各会場の定員に達し次第締切りとします。

参加の可否については、お断りする場合のみ御連絡致します。

なお、参加の可否について連絡が必要な場合は、 にその旨明記して下さい。

6 . 申込み・問合わせ

〒112-8640 東京都文京区大塚3-29-1

学術情報センター教育研修部研修課企画係

TEL : (03) 3942-6935

FAX : (03) 5395-7477

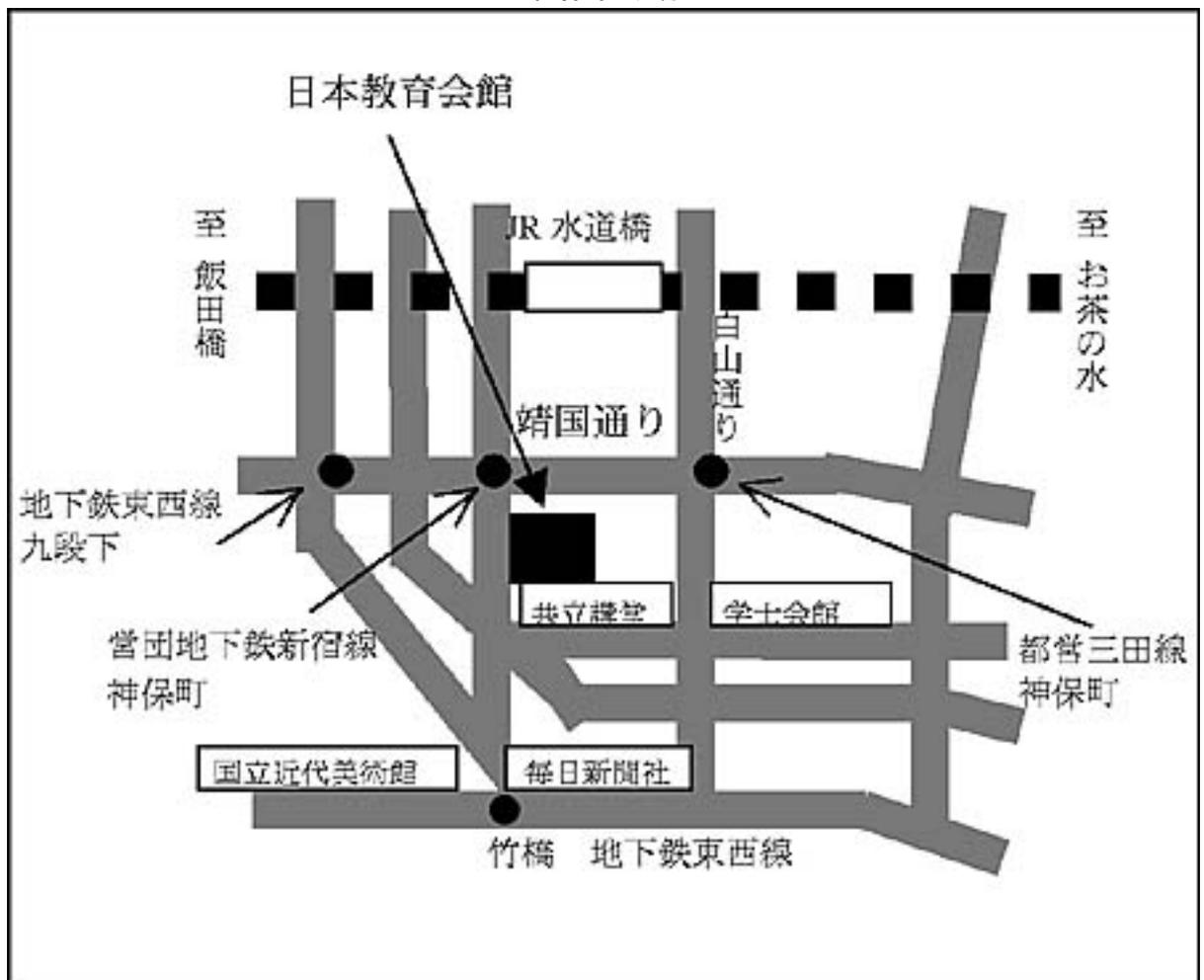
URL : <http://www.nacsis.ac.jp/nacsis.index.html>

e-mail : edu@hrd.nacsis.ac.jp

7 . 会場案内図 両会場とも駐車場がありませんので、車でのご来場はご遠慮ください。



関西会場



東京会場

海外からの来訪者一覧（平成11年4月1日 - 7月31日）

- | | | |
|-------|-------------------------|--|
| 4. 9 | Dr. Lawrence Lee Rauch | 元カリフォルニア工科大学ジェット推進研究所 |
| 5. 12 | Ms. Sanae ISOZUMI | カリフォルニア大学サンディエゴ校国際関係・太平洋研究図書館および東アジアコレクション日本研究図書館員 |
| 5. 20 | Ms. Yuh-Mei Shyu | 台湾科学技術資料中心 |
| | Mr. Micheal J.T. Chiou | 台湾科学技術資料中心 |
| | Ms. Li-Min Cheng | タンカン大学チューシェン記念図書館副館長 |
| | Ms. An-Chi Lin | 台湾国立中央図書館システム図書館員 |
| | Ms. Shaw-Li Chen | 台湾科学技術資料中心 |
| 6. 1 | Ms. Kana KODAMA | 米国ラトガース大学大学院コミュニケーション・情報・図書館学研究科学生 |
| 6. 3 | Prof. Choe Jung-Ta | 釜山大学校文献情報学科教授 |
| | Prof. Park Joeng-Gill | 慶星大学校文献情報学科教授 |
| | Prof. Song Jung-Sook | 釜山大学校文献情報学科教授 |
| | Prof. Lee Jae-Whoan | 釜山大学校文献情報学科教授 |
| | Ms. Rho Jee-Hyun | 釜山大学校文献情報学科博士課程 |
| | Mr. Cho Young-Wan | 釜山大学校文献情報学科碩士課程 |
| 6. 17 | Mr. Volker KLEIN | ベルリン日独センター事務総長 |
| | Dr. Nguyen Viet Nghia | 科学技術振興事業団研究基盤情報部研究支援情報部門STAフェロー研修生 |
| 6. 23 | Dr. Bong Hee Kim | 韓国梨花女子大学図書館長，教授 |
| | Ms. In Sook Ha | 韓国梨花女子大学図書館主任司書 |
| | Ms. Nancee Lee | 韓国梨花女子大学図書館電子情報サービス部リファレンスおよびシステム担当司書 |
| 7. 2 | Ms. Chiaki SAKAI | ハワイ大学図書館情報科学科学生 |
| | Ms. Yumi KITAMURA | ハワイ大学図書館情報科学科学生 |
| | Ms. Rae SHIRAKI | ハワイ大学図書館情報科学科学生 |
| 7. 5 | Mr. Eiichi ITO | 国際交流基金ロスアンゼルス事務所日本語センター図書館司書 |
| 7. 9 | Ms. Ellen H. Hammond | アイオワ州立大学日本研究図書館員 |
| | Ms. Kazuko SAKAGUCHI | イリノイ大学アジア図書館員 |
| 7. 22 | Ms. Kao Chiu-Fang | 台湾科学技術資料中心部長 |
| | Ms. Shin Mei-Yuh | 台湾科学技術資料中心 |
| | Mr. Tashi Tobgay Jatsho | ブータン総理府福祉部プログラマー |

Mr. Kone Mamadou	ブルキナファソ外務省総務部コンピュータ課システムアナリスト
Mr. Ndjomeni Macaire	カメルーン地域開発・公共投資省経済および技術協力部プロジェクト管理者
Mr. Adoum Ousmane Aldjaramy	チャド外務省官房室特別秘書官
Mr. Gu Zhaofeng	大連恒基コンピュータ会社ネットワーク部システム開発課システムエンジニア（中国）
Mr. Sanjeeb Kumar	地質鉱物資源省地質調査部フィジー地質情報システム課プログラマー・アナリスト
Mr. Rami Najeeb Zaghloul	ジョルダン国家航空省情報部アプリケーション課プログラマー・アナリスト
Mr. Adnrew Gichuho Mungai	ナイロビ大学コンピュータ科学科チーフアナリスト・プログラマー（ケニア）
Mr. Sidi Ould Sid'Ahmed	モーリタニア内国省情報部情報課主任
Ms. Kalpana Upadhyay	ネパール国家計画委員会事務局コンピュータ部農務課アシスタントプログラマー・オペレーター
Mr. Muhammad Maqbool Khan	パキスタン金融経済省経済部負債管理コンピュータセンターデータ入力オペレーター
Mr. Andrew Joseph Mwellla	通信運輸省タンザニア港湾局管理部データ処理課プログラマー
Mr. Said Salim Aman	タンザニア水力エネルギー省コンピュータ部システムアナリスト
Ms. Gladys Muspelo	ザンビア国税庁情報技術部情報技術技師
7. 28 Prof. Edward Fox	バージニア工科大学計算機科学科教授

（国際交流係）

[目次へ戻る](#)

[次へ](#)

人事異動（平成11年6月 - 8月）

発令年月日 〔職務命令〕	氏名	新官職名など	旧官職名
11.6.1	西澤 正己	情報研究の中核的研究機関創設準備室勤務 命	
	吉岡 真治	情報研究の中核的研究機関創設準備室勤務 命	
〔転入〕			
11.7.1	松岡 憲雄	管理部長	香川大学経理部長
11.8.1	小林 一男	管理部会計課施設係	大阪大学大型計算機センター
〔転出〕			
11.7.1	岸 継明	佐賀医科大学事務局長	管理部長
11.8.1	杉本 雅則	東京大学情報基盤センター助教授	研究開発部システム研究系ソフトウェア工 学研究部門助手

[目次へ戻る](#)